

信仰告白解説書

私たちの信仰

改訂版

福音交友会

私たちの信仰

目次

刊行の辞	4
福音交友会信仰告白文	7
福音交友会信仰告白解説文	
一、聖書の項	12
二、神の項	21
三、父なる神の項	30
四、子なる神の項	37
五、聖霊なる神の項	48
六、人の項	57
七、救いの項	66
八、教会の項	76
九、終末の項	85

刊行の辞

「もしあなたがたがよく考えもしないで信じたのでないなら、私の宣べ伝えたこの福音のことばをしつかりと保つていれば、この福音によつて救われるのです。」

第一コリント一五章二節

神のことばである聖書によつて、私たちはキリストのもとに導かれ、キリストを信じる信仰を与えられ、教会の一員とされています。聖書こそが私たちの信仰と教会の土台であり、導きの光です。

けれども、同じ聖書を与えられておりながら、多くの異端や間違つた教えが世に出てきているのも事実です。キリスト教会の歴史は、絶えず、何が聖書の教えであるかが問われ続けた歩みであり、その結果、重要な教理を要約した信条や信仰告白文が作成されてきました。今日、私たちが用いている使徒信条はその最も古いものの一つです。

私たちが、福音交友会として信仰告白を表明するのは、私たちが、聖書の中で何を重要な教理として信じているかを明白にするためです。多くある教えを要約して、私たちは九ヶ条の信仰告白を表明し、私たちの信仰と聖書理解を明確にしています。この九ヶ

条は、すべて聖書に基づいており、いささかも聖書の教えから逸脱したのではないと信じております。

また解説書は、信仰告白文の意味、内容を明らかにするためのものです。今日、キリスト教会の多くの教団、教派は、ほとんど同じ信仰告白文を持っています。けれども、しばしば、告白文で表明されている用語が異なった意味を持つものとして変えられて、必ずしも同じ信仰を持っていないという現状があります。そのような混乱は、聖書の項や聖霊、終末の項に多く見られます。この解説書においては、そのような実状を覚え、信仰告白文に沿って、聖書からその意味を解説するように努めました。解説自体が聖書に基づいていることを確認するために、引用聖句を多く入れました。学ぶ時には、聖書箇所を一つ一つ開いて学んでいただきたいと願っています。

この解説書が福音交友会の諸教会の教会員教育やバプテスマ準備クラスなどにおいて用いられ、すべての信徒が学んで、その信仰が確かなものとされる一助となるように祈ります。教会のかしらであるキリストが、この信仰告白文と解説書を用いて、私たち福音交友会にある諸教会の一人一人が、同じ信仰を告白し、同じ理解をする一つの群れであることを確認させていただき、感謝いたします。

最善を尽くしたとはいえ、不備などころがあれば更に改正され、永く福音交友会諸教

会の兄弟の信仰の明確化のために、この解説書が用いられるように祈ります。

主に感謝しつつ

一九八八年 三月

福音交友会信仰告白

私たちは次のことを信じ、告白します。

一、旧新約聖書六十六巻は、原典において靈感された神のことばである。それゆえ聖書は、神が救いについて啓示しようとされたすべてのことを含み、信仰と生活の唯一絶対の規範である。

二、生けるまことの神は、唯一であって、父、子、聖霊の三位において永遠に存在される。

三、父なる神は、天地万物を創造し、これを保持し、統治される。また、主権をもって、人を救いを選び、贖いの計画を全うされる。

四、子なる神、主イエス・キリストは、まことの神、まことの人である。主は聖霊によつ

てみごもった処女マリヤより生まれ、すべての人の罪のために十字架にかかり、死に、葬られ、三日目からだをもつてよみがえり、天に昇り、今、神の右に座し、私たちのために大祭司の務めをしておられる。やがて、みからだをもつて再臨される。

五、聖霊なる神は、人格を持ち、罪と義とさばきについて人にその誤りを認めさせ、新しく生まれさせ、キリストに結びつけ、救いの保証となられる。聖霊はすべての聖徒に内住し、聖化し、助け主、教師、導き手として働かれる。

六、人は神のかたちに創造されたが、父祖アダムがサタンの誘惑により神の戒めを破り、罪を犯したため神との交わりを断たれた。その結果、人は罪の性質をもつて生まれ、その思いも言葉も行為も罪ある者となった。それゆえ、すべての人は霊的な死と肉体的な死の下におかれ、永遠のさばきに定められている。

七、人は神の選びを受け、キリストを信じることによって、キリストの身代わりの死と復活のゆえに罪を赦され、義と認められ、死からのちに移される。また、神の子とされ、御子に似たものへと変えられてゆく。ひとたび救われた者は決して失われること

なく、永遠に保たれる。

八、教会は、聖霊により召し出された者によつて構成されるキリストのからだであり、そのかしらはキリストである。教会は礼拝を守り、聖礼典を執行し、宣教の使命を遂行して、主の再び来られる日を待ち望む。

九、神はこの世をさばくため日を定めておられる。その日、主イエス・キリストは再臨され、キリストを信じる者は携挙され、主とお会いする。その後、主は地上に千年王国を打ち建てられる。サタンはさばかれ、永遠の火に投げ込まれる。すべての人はからだをもって復活し、救われた者は永遠の祝福を受け、滅びる者は永遠の刑罰を受ける。

信仰告白解説文

一 「旧新約聖書六十六卷は、原典において靈感された神のことばである。それゆえ聖書は、神が救いについて啓示しようとしたすべてのことを含み、信仰と生活の唯一絶対の規範である。」

1 旧新約聖書六十六卷は、原典において靈感された神のことばである▽

神は全被造物によって、ご自身の永遠の力や神性を啓示し（詩一九・一〜六、ロマ一・二〇）、また歴史を通してご自身の支配を現わしておられます（使一七・二六、二七）。しかし、神から離れ、神を知る理解力が暗くなっている人間（ロマ一・二一、エペ四・一八）には、ことばによる特別な啓示を与えてくださいました。神は昔から預言者を通して、多くの部分に分け、いろいろな方法で語られました。遂には、御子キリストの教えとみわざによって、人に対するご自身のみこころを明らかにしてくださいました（ヘブ一・一、二）。神はそれらのことばを、旧新約六十六卷の聖書として、私たちに与えてくださったのです。

① 旧新約聖書六十六卷が神のことば

私たちが神のことばであると信じ、告白するのは、旧新約聖書六十六卷だけで、外典と呼ばれるものは含まれません。カトリック教会は、旧約聖書の中に複数の外典を含め、

これを第二正典としています。ユダヤ教は、旧約聖書だけを正典として認め、新約聖書を除外しています。

聖書が書かれた時代にも、他に宗教的な書物はたくさんありましたが、それらの中から、聖書の六十六巻が正典として認められるようになりました。旧約聖書三十九巻については、キリストがそれらを神のことばとして認めておられます（マタ五・一八、一九、ルカ二四・四四等）。新約聖書二十七巻については、主によって任命された使徒たちによって書かれたものであるか、使徒たちの教えにかなったものであるかどうかによって他の書物と区別されてきました。

聖書六十六巻の正典性は、その全体の整合性、密接な相関性、統一性、崇高性などによって、また実際に、罪人に知恵と力を与えて、確かな救いを受けさせることによつて明らかであり、自然に認められます。しかし、教会が、聖書の正典性をこのように認めることができたのは、聖書を靈感された聖霊のあかしによつていのです。人間の理性や知恵、宗教的直感が正典を決めたのではなく、どれが靈感された神のことばであるかを明らかにされた聖霊のあかしが正典決定の規準だったのです。

② 聖書は原典において誤りのない神のことば

聖書が全知全能の神のことばであれば、聖書は誤りえず（不可謬性）、実際に誤りが

ない（無誤性）というのは当然のことです。しかし、その場合、聖書の原典（著者たちの肉筆）においてということ、聖書の写本やその翻訳においてではありません。原典は失われていますが、現在多くの古い写本が残されており、それらの比較研究が重ねられてきた結果（本文批評学）、今日私たちが手にしている原語の聖書は、ほとんど原典と変わらないものになっています。さらに、翻訳については原語に忠実に翻訳する努力が重ねられて来ています。

聖書が不可謬で無誤であるということは、聖書の中に理解や解釈の困難な箇所や、一見矛盾しているように見える箇所が全くないということではありません。しかし、それらはかえって、聖書解釈の正しい原則を考えさせ、教えるものとなりました。

③ 聖書は、靈感された神のことば（Ⅱテモ三・一六、Ⅱペテ一・二二）

聖書は約一五〇〇年にわたり、約四〇人の人々によつて書かれましたが、それらの人々が聖書の感動を受け、聖霊に動かされて書いたために（これを靈感と呼ぶ）、その内容には驚くべき統一性と一貫性、また崇高性があります。

聖書が靈感されているとは、聖書の著者たちが神のみこころを正しく理解させられ、それを思想だけでなく、一言一句のことばに至るまで正確に書きしるすことができるように、神が聖霊によつて、彼らを導き、あらゆる誤りから守られた、ということなのです。

その場合、神は著者たちの人格や個性を無視されることはなさいませんでした。聖書のことばはみな、神の靈感によるものであり（Ⅱテモ三・一六）、一点一画たりともおろそかにしてはならないものです。

靈感については、次のような間違った理解があります。例えば、聖霊はあたかもコンピュータに情報をインプットするように、著者たちの個性、才能、時代背景を無視して、機械的に一語一語を書かせられたとする機械的靈感説、また、聖書のある部分、例えば、山上の説教や主のことばなどだけが靈感されているという部分的靈感説、すぐれた文学作品が靈感を受けて書かれたと一般に言われるのと同じ意味で聖書は靈感されているという自然的靈感説、靈感は聖書の思想内容だけで、一字一句のことばにまでは及んでいないとする思想靈感説などがあります。また、カール・バルトに代表される新正統主義神学は、聖書は靈感されている客観的な神のことばではなく、読む人の中で神のことばになる、と説明します。私たちはこれらの靈感に関する間違った見解を退けません。

2 〆それゆえ聖書は、神が救いについて啓示しようとされたすべてのことを含み〷

聖書は何よりも、イエス・キリストに対する信仰による救いを啓示し、実際にキリス

トに対する信仰による救いを得させる知恵と力を与える書物です（Ⅱテモ三・一五）。ですから、聖書はキリストご自身について証言し（ルカ二四・二五～二七、ヨハ五・三九）、キリストによる救いについていっさいのことを明らかにしています」（ルカ二四・四四～四七、使一三・二七、ロマ三・二一～二四、Ⅰコリ一五・三、四）。

聖書が書かれた目的は、三位一体の神が、キリストによって罪人の救いを備えてくださったことを明らかにし、人間がその救いを受け入れるべきことを強調することにあります。ですから、聖書は政治、社会、歴史、科学などの諸学問の専門書ではありません。しかし、その事はそれらのことについての誤った記述が聖書にあつたり、聖書がそれらのことを軽んじているというではありません。

3 ^信仰と生活の確一絶対の規範であるV

私たちは聖書以外に、信仰と生活の基準となるものを認めません。これは聖書が他の書物とは異なる、靈感された神のことばであることを信じる信仰の当然の帰結です。確かに種々の信仰書や説教は私たちの助けになりますが、それらは聖書の教えにかなって
いる限りにおいて有益なのです。

歴史をふりかえると、信仰と生活の規範について、紛らわしいものがたくさんありま

す。例えば、聖書から離れた熱狂的信仰や肉の熱心によって受けた、神からの啓示だとされるもの（異端、様々な神秘的体験、コロニ・一八等参照）や、カトリック教会で使徒から伝えられたといわれる聖伝（『カトリック教会のカテキズム』81―83）などがあります。カトリック教会は聖伝も神の啓示であり、聖書と同等に重んじるように教えています。しかし、教会は聖書を土台とし、キリストをその礎石として建てられているものですから（エペ二・二二）、みことばによって養われ成長するものです（使二〇・三二、Iペテ二・二二）。聖書こそキリスト者をすべての良い働きのために整えるものです（IIテモ三・一七）。聖書は過去、現在、未来にわたって、私たちの信仰と生活の唯一絶対の權威であり、規範です。私たちは聖書によって、教えと戒めと矯正と義の訓練とを受けられるのです（IIテモ三・一六）。私たちは、どのような時にも、どのような事柄についても、いつも聖書に聴き、聖書を学び、聖書に従うよう努めなければなりません。

付記

① 「聖書の解釈」

聖書は神のことばですが、人がそれを受けとる時、間違っただけで解釈する可能性があります。聖書は正しく解釈されなければなりません（IIペテ一・二〇）。

一六世紀に宗教改革ののろしをあげたルター（一四八三～一五四六年）は、当時の学者たちが、靈的解釈と称して、余りにも複雑で主観的な寓喩的解釈にふけていたのに対し、聖書の字義通りの文法的意味と、聖靈の照明による助けによって見いだされる、聖書の真の靈的意味を知ることの重要性を強調しました。そして、「聖書が聖書自体の解釈者である」という原則を残しました。

カルヴァン（一五〇九～一五六四年）は、主観的な解釈を排除するために、聖書記者の上に働いた聖靈の靈感と、聖書解釈者に対する聖靈の内的あかし（照明）を強調し、「著者が言うべきであると我々が考えることを著者に押しつけるのではなく、著者が語っていることを著者に語らせることが解釈者の第一の仕事である」と主張しました。

以上のことは、今日の私たちの聖書解釈の基本となっています。すなわち、聖書は、文法的意味、文脈、歴史的文化的背景、全体の流れを考慮し、聖靈の照明（ヨハ一四・二六、一五・二六、一六・一三、一ヨハ二・二〇、二七）を受けて解釈されるべきである、ということですが。聖書はこのようにして正しく解釈されることによって、キリスト者の信仰と生活の唯一絶対の規範として用いられるのです。

② 「聖書解釈上の実際の注意」

神の啓示である聖書は、一度に全部与えられたものでありませんので、聖書解釈にあたっては、啓示のことばが与えられてきた各時代の文化的、社会的背景を考慮する必要があります。ヨシユアの時代、ダビデの時代、エリヤの時代などに許されてきた事がそのまま新約の時代に許されるとは限らないのです。

ヘブル一〇・一やコロサイ二・一六、一七にあるように、律法は後に来られるキリストの影です。本体であるキリストが来られた時、律法は成就されましたので、今日私たちは旧約の儀式や安息日などを守る必要はなくなりました。すなわち、その成就を告げている新約を旧約に優先させているのです。しかし、旧約を捨てるものではありません。

新約聖書の解釈においても、福音書などは書簡の光に照らして初めて正しく理解できます。キリストのことばも、そのことを裏付けています（ヨハ一六・一二、一三）。

さらに、出来事や歴史的事実を描写した箇所よりも、教理を論述した箇所が優先します。例えば、ペンテコステの時の歴史的出来事（使二・一〜四）やペテロが幻を見た経験（使一〇・九〜一六）などを教理化し、一般化することはできません。これらは文脈や、明白な教理的教えの光のもとで解釈されるべきです。象徴的なことばで書かれている箇所も同様です。

最後に、私たちの解釈には限界があることも認めておかなければなりません。聖書時

代の言語や、歴史的文化的背景について完全に知り得ない以上、これは避けられないこととです。ですから、解釈を、一つの可能性としてしか提示できない場合もあります。その場合、他の人の解釈も尊重して、互いに正しい理解を求めてゆくべきです。しかし、聖書の重要な教理はすでに明白に確定されているのですから、正しい解釈の原則を無視して明白な教理を歪めることがあつてはなりません。

聖書を正しく解釈し、その教えに従順に従ってゆくことこそ、大きな祝福とあかしのものとです。

二「生けるまことの神は、唯一であって、父、子、聖霊の三位において永遠に存在される。」

1 ^ 生けるまことの神は ^

① 神は、霊なるお方です

神は物質的な実体ではなく、霊的な存在です（ヨハ四・二四）。すなわち、神は非物質的な存在であり、私たちの目には見えないお方です。旧約聖書の中で、主がホレブにおいてイスラエルの人々に現われたとき、彼らは主の姿を見ることができませんでした。ですから、神を表わすどんな偶像も造るべきではないと戒められています（申四・一五〜一九）。新約聖書において、使徒ヨハネは、「いまだかつて神を見た者はいない」（ヨハ一・一八）と語っています（コロ一・一五、Iテモ一・一七、六・一六）

② 神は、生けるまことの神です

霊なる神は、生命を持たない実体ではなく、生きておられるお方です。聖書は神を「生ける神」（ヨシ三・一〇）と呼んでいます。神は「ご自分のうちにいのちを持っておられる」お方です（ヨハ五・二六）。そして、自己充足、独立自存のお方であり、他者依存的で変化する被造物とは違います。この神こそ、いのちの源です（Iテサ一・

九)。

③ 神は、人格を持っておられます

神は非人格的な霊ではなく、人格としてのあらゆる特徴を備えておられます。人格の本質は「自意識」と「自己決断」ですが、聖書は、神が知り、感じ、意思を用いられるお方であることを啓示しています(創一・三、五、三一、六・六等)。神が人間を、ご自身のかたちに似せて、人格的な存在として創造してくださったことにより、人間は神との交わりが可能なのです。

④ 神は、道徳的なお方です

a 神は聖なるお方です

神の聖さ(聖性)とは、神は被造物とは絶対的に異なり、はるか高くにおられる、ということです(出一五・一一、一サム二・二、イザ四〇・二五、五七・一五)。また、神の聖性には倫理的な側面もあります。すなわち、神はいっさいの悪と罪から完全に離れているお方であり、それらを徹底的に憎まれます(ヤコー・一三)。

b 神は正しい(義なる、公平な)お方です

聖書はいたるところで、神を「正しい方」、「義なる方」と呼んでいます(エズ九・一五)。神の義と正義は、被造物に対する神の取り扱いのうちに見られる神の聖さの一

局面です。神はすべてのものを分け隔てせずに取り扱われ、そのみわざは公平です（申三二・四）。神は不義におもねたり、妥協することなく、正しいさばきを行なわれます（黙一五・四）。

c 神は愛なるお方です

神は聖い正しいお方であり、人間を公平に取り扱われますので、罪人に対して死の刑罰を与えられました。しかし、神は愛のゆえに、カルバリにおいて罪人の身代わりとして罪の刑罰を受けさせるために、「ご自身の御子を遣わされました。ここに、神の聖と愛とが美しく現わされたのです。

2 唯一であつてV

生けるまことの神は他の何ものにも依存されないもので、当然「唯一」の神です。もし、他にもそのような「自存」の神が存在するとすれば、神はもはや、あらゆる存在の根源とは言えなくなるでしょう。「自存」の神はあくまで「唯一」の神でなければなりません。まさしく、聖書に「主は私たちの神、主はただひとりである」（申六・四）と記されているとおりです（ヨハ一七・三、ロマ一六・二七、I コリ八・四、I テモ一・一七、二・五）。

3 父、子、聖霊の三位において▽

① 三位一体

聖書は、生けるまことの神を三位一体のお方として啓示しています。三位一体とは、神はその本質においてただ一つであるが、この唯一の存在の中に父なる神、子なる神、聖霊なる神の三位格が存在し、その三位格は力と栄光において同等である、ということです。

三位一体という用語は聖書にはありません。最初にその用語を用いたのはテルトリウスで、二世紀後半のことです。三位一体が教会の論争となり教理としての一応の確立をみたのは四世紀のことです。三位一体は聖書の中の重要な教理の一つですが、人間の理解を越えたことであり、人間の言葉で十分に説明することには限界があります。アウグスチヌスはいみじくも次のように述べています。「我々は三位について語る。それによつて完全に表現しようとするのではなく、全然表現しないでおくことにならないためである。」

② 三位一体に関する聖書の教え

三位一体に関する最初の手がかりは創造の記事のうちにあります。神は人間を創造す

る時、「われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう」（創一・二六）と言われましたが、この「われわれ」という表現は、神が三位一体であることを暗示していると考えてよいでしょう。

また創世記一六章から一九章にかけて何回も登場する「主の使い」は、父なる神とは異なる神的人格として描かれています。さらに、聖霊は、主なる神と共におられる別の人格を持つ神として記されています（イザ四八・一六、六三・一〇、一一、一四等）。

父なる神と御子については「主（父なる神）はわたしに言われた。『あなたは、わたしの子、きょう、わたしがあなたを生んだ。』」（詩二・七）と書かれてあり、父なる神と聖霊については「あなた（父なる神）が御霊を送られると、彼らは造られます。」（詩一〇四・三〇）と記されています。このように、旧約聖書においては、御子が父なる神から遣わされた方として、また父なる神や御子と区別される聖霊が主の御霊として書かれています。

新約聖書はさらに多くを啓示しています。特に、三位格がいっしょに記されている箇所が少なくとも三個所あります。すなわち、御子イエスのバプテスマ（マタ三・一六、

一七)、御子イエスが弟子たちに語られた大宣教命令(マタ二八・一九)、そしてパウロの祝祷(Ⅱコリ一三・一三)の記事です。

このように、神が三位一体のお方として存在される、という聖書全体に見られる啓示によって、三位一体の教理は、初代教会から現代に至る正統的信仰の中心的教理となってきました。どのような形においてであれ、この教理からはずれることは聖書の真理からの逸脱と見なされてきました。

神のご性質の比類ない独自性は、人間の経験によって、完全に例証することも、比較することもできないものです。ですから、三位一体の教理は、たとえ人間の理解と定義の範囲を越えるものであっても、聖書の啓示に基づいて信仰によって受け入れるべきものです。

③ 位格相互間の関係

三位一体の各位格は等しい属性を持つてはいても、ある種の特性においては、おの他の異なります。そのために、三位一体の第一位格は御父と呼ばれます。第二位格は御子と呼ばれ、父なる神によって遣わされています。第三位格は御父と御子とから遣わされ、聖霊と呼ばれます。この順序は決して逆にはなりません。つまり、御子が御父を遣わすことはなく、また、聖霊が御子を遣わすこともありません。

④三位一体の教理についての主要な異端

a サベリウス主義（三世紀）

彼らは「父、子、聖霊は、単一なる神の異なった顕現に過ぎない。神は目的を達するために、一時的にそのような顕現をするのである。」と主張しました。すなわち、彼らは、父としての神は創造者、また律法の授与者であり、子としての神は同一の神が肉体をとられたものであって、贖い主の職務を遂行され、聖霊としての神は新生と聖化のわざをつかさどり、やはり、同一の神である、と教えました。これは、正統的な三位一体とは異なる様態の三位一体説であり、神が一つであることを弁護しようとして三位格を否定するに至った例です。これは本質における三つの人格の区別ではなく、一つの人格の三つの変化に過ぎません。結果的に、三人格は一人格に縮小されてしまったことになります。

b アリウス主義（四世紀）

アリウスは単一神論的神観に立って、三位一体的立場を退けました。彼は、父なる神だけが神であり、子は神ではなく、子と父なる神とは異質であると考えました。彼は「もし、父なる神が御子を生んだのなら、生まれた者には存在の始めがあったはずである。そうすると、御子の存在しなかった時というものがあったことは明白である。そこ

で当然、御子は無存在から存在を得たことになる」と言うのです。こうして、アリウスは御子を父なる神より下の水準に引き下げたのです。

しかし、アリウス主義は三二五年のニカイア会議で異端として退けられました。

c 宗教改革以後の異端

宗教改革以後、イタリア、スイス、ドイツ、ポーランドなどに、反三位一体的神学の教会運動であるソツツイーニ主義が起りました。ソツツイーニ主義によると、神の位格は父なる神だけであり、キリストは崇高な生活によって神性をかちとった人間に過ぎませんでした。彼らは神の単一性（ユニテイ）を主張し、キリストの神性を否定しました。この運動は後に、イギリス、アメリカへも拡大し、ユニテリアン主義と呼ばれます。

また、今日では、ものみの塔（エホバの証人、ラッセル主義）やモルモン教なども御子と聖霊に父なる神よりも劣る性質と地位を与えることによって、三位一体の正統的教理を否定しています。

4 へ 永遠に存在される V

生けるまことの神は永遠に存在されるお方です。神が全能の神であれば、その神が永

遠に存在されるのは当然のことです。神には初めもなく、終わりもありません。聖書は、神が「永遠の神」(創二一・三三)、「ただひとり死のない方」(Iテモ六・一六)であると啓示しています(詩九〇・二、イザ四〇・二八、五七・一五)。

三「父なる神は、天地万物を創造し、これを保持し、統治される。また、主権をもって、人を救いに選び、贖いの計画を全うされる。」

1 ^父なる神は▽

「父なる神」とは、私たちが信じ、告白している神がすべて信じざる者の父であり、三位一体の第一位格であられることを示しています。

神は、旧約聖書では選民イスラエルに「ご自身を父と呼ぶことをよしとされました。(申三二・六、イザ六三・一六、六四・八、エレ三・四、一九、三一・九、マラ二・一〇)」。と同時に、神は契約の民に対し、「イスラエルはわたしの子、わたしの初子である。」(出四・二三)と呼び、ご自身の父性を啓示しておられます(ホセ一・一)。

新約聖書では、神がキリストを信じる者の父であられることがイエス・キリストによって啓示されています。十二弟子のひとりピリポがイエスに「主よ、私たちに父を見せてください。」と言った時、イエスは「わたしを見た者は、父を見たのです・・・」(ヨハ一四・八、九)とお答えになりました。人はキリストの贖いによって、父なる神を知り、恵みによって神の子とされ、聖霊の働きによって、神を父と呼ぶことができるのです(マタ六・九、ヨハ二〇・一七)。この恵みは新生により(ヨハ一・一二、一

三)、また子としての身分が与えられることによって(ガラ四・五、六)授けられるのです。

ただイエス・キリストが神を「父」と呼ばれる時、それは神との絶対的な意味での父であり、キリスト者が神を「父」と呼ぶ時には、イエス・キリストを通してという条件的な意味での父です。

2 ^ 天地万物を創造し V

「天地万物を創造し」という時、万物の始まりが神の創造によるものであることを告白しています。この世に存在するもので神の創造によらないものはありません(創一・一)。創造は神の栄光を現わすことを意図したものであつて、主の栄光の舞台といえます(黙四・一一)。

創造の教理の基礎となるのは、「信仰によって、私たちは、この世界が神のことばで造られたことを悟り、したがって、見えるものが目に見えるものからできたのではないことを悟るのです。」(ヘブ一・三)という聖句です。神の創造のみわざは神の啓示に基づき、信仰によって理解されるのです。また、神の創造は「無からの創造」(ロマ四・一七)であり、従つて物質が先在したり、永遠であつたりすることはありません。

神は無生物ばかりではなく、生物を種類に従って創造されました。

また、神はご自身のかたちに人を創造されました（創一・二七）。神は土地のちりて人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれたので、人は生きものとなりました（創二・七）。人間は被造物の中で全く独自の立場を与えられています。神の愛の対象であり、創造の冠である人間は決して進化論者の言うような低次の種から高次の種へと進化したものではありません。

聖書は、創造のみわざを、父なる神独自のわざとしてだけでなく（申三二・六、イザ四四・二四）、御子のわざ（ヨハ一・三、コロ一・一六）、また聖霊のわざ（詩一〇四・三〇）でもあると記しています。従って、創造は三位一体の神のみわざですが、天地万物の創造をみこころと定め、それを主導されたのは父なる神です。その意味で、使徒信条にも「我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず」とうたっています。

3 ^ これを保持し

神は世界を創造された後、被造世界から身を引くことをせず、また、それ自体の運行にまかせるといふことをなさいませんでした。神は世界から遠く離れて、この世界とのいっさいのかかわりを拒んでおられるではありません（使徒一七・二七、二八）。む

しる、神はこの世界が、創造された目的に従って機能するように、この世界と積極的にかかわり、被造物を支え、保っておられます。この働きを「保持」と言います。神は創造されたすべてのものを破壊から守られるばかりでなく、それらをご自身の目的のために、それぞれの特質や力を持たせたまま維持するために間断なく働いておられます（ヨハ五・一七）。保持を証拠だてる聖句として、ネヘミヤ九・六、詩篇一〇四・一四、マタ五・四五などを挙げる事ができるでしょう。

4 へ統治されるV

神はこの被造世界を創造し、保持されるだけではなく、この被造世界をご自身の目的にそって支配しておられます。この神のみわざを統治と言います（出一五・一八、詩二二・二八、四七・八、六六・七等）。神は人間の歴史の創始者であると共にその導き手であり、完成者であります。「神は、ひとりの人からすべての国の人々を造り出して、地の全面に住ませ、それぞれに決められた時代と、その住まいの境界とをお定めになりました。」（使一七・二六）と聖書に記されているとおります。

神の統治に関して、いつも発せられる問いは「もし神がこの世を支配しておられるのなら、なぜこの世の悪が見過ごされているのか」というものです。人間には神のみここ

ろのすべてが明らかにされているわけではありませんので、具体的な個々の事例の全てに答えるわけにはゆきませんが、次の事は言えるでしょう。

第一に、悪や罪やわざわいなどは神のみこころによるのではない。また、神はそれらの起源ではない。第二に、何事も神の許しなしには起こり得ない。「雀の一羽でも、あなたがたの父のお許しなしには地に落ちることはありません。」（マター一〇・二九）。第三に、私たちに理解できないことについては「神がすべてのことを働かせて益としてください」ことを信じ、告白し続ける信仰が必要である。第四に、悪が見過ごされていることのうちに、神のさばきを見なければならぬ（ヨハ三・一八b〜二〇、ローマ一・二四、二六、二八）。第五に、神は究極的にイエス・キリストによって義をもってこの世界をおさばきになる（使一七・三一）。すなわち、キリストは再臨によって、あらゆる支配と、あらゆる権威、権力を滅ぼし、国を父なる神にお渡しになり（Iコリ一五・二四）、こうして、父なる神の完全統治が実現する。

尚、保持と統治とを合わせて摂理と表現されることもあります。

5 へまた、主権をもって▽

神は目に見えるもの、見えないものの全てを創造された方として、あらゆるものの所

有者であり、従って全てのものを支配する絶対の権威を持つておられ、実際にその権威を被造世界において働かせておられます。これを神の主権と言います（Ⅰ歴二九・一、詩二四・一、イザ四五・九、エゼ一八・四、ダニ四・三五）。

神の主権は、人間の暴君が勝手気ままに権威をふるうようなものではなく、神の道德的屬性である聖さ、義、善、真実などにならって示され、発揮されます。また、神の主権は普遍的であり、絶対的ですが、同時にそれは独り子イエス・キリストを惜しまずに与えてくださったことによつて現わされているように愛の主権でもあります。

6 人を救いに選び

神の主権は人間の救いにおいても示されています。アダムの墮落以来、罪の性質をもつて生まれた人間はその意志が全く腐敗しているので、自分自身では救いのために何もすることができません。そこで神は人間の罪を贖うために御子を遣わして救いの道を備え、その救いに、人を選びました。聖書は、私たちの救いが、神の絶対的な意志すなわち、選びによることを教えています（ヨハ一五・一六、ロマ九・一一、エペ一・四）。

7 〆 贖いの計画を全うされる 〱

贖いという言葉は元来、代価・身代金を払って束縛や捕われの状態にある者（特に、奴隸）を身受けすることを意味しています。

父なる神のご計画に従って、イエス・キリストは罪の奴隸となっている私たちの身代わりとなって、十字架にかかってくださいました。その結果、私たちはサタンと罪と死の支配から解放されます（マコー〇・四五、ロマ八・二、ヘブ二・一四、一五）。この人類救済の計画は父なる神によって立てられ、御子イエスを通して成就され、御子イエスの再臨において完成されます。その日には、贖いは人間に対してばかりではなく、人間の罪の結果、虚無に服するようになった被造物全体にも及ぶようになります（ロマ八・一八〜二二）。

四 「子なる神、主イエス・キリストは、まことの神、まことの人である、主は聖霊によつてみごもった処女マリヤより生まれ、すべての人の罪のために十字架にかかり、死に、葬られ、三日目からだをもつてよみがえり、天に昇り、今、神の右に座し、私たちのために大祭司の務めをしておられる。やがて、みからだをもつて再臨される。」

1 子なる神、主イエス・キリストは▽

子なる神は、新約聖書においては「主イエス・キリスト」と呼ばれています(使二八・三一、ロマ五・一、Ⅱペテ一・一四)。イスラエルでは、名は便宜上の呼称ではなく、帯名者の本質や性格を表わすものと考えられていました。「主イエス・キリスト」という名も単なる氏名ではなく、子なる神が私たちにとっていかなる方であるかを啓示しているということができます。

「主」ということばは、主権者なる神を表わすために用いられました。「イエス」は、イスラエルでは一般的な個人名で、「救い」を意味することばでした。そのヘブル名は「ヨシユア」です。「キリスト」とは、「油そそがれた者(メシヤ)」という意味のヘブル語のギリシャ語訳で、油を注ぐ儀式を経て王、祭司、預言者に任命された者に与えられる称号でした。従つて「主イエス・キリスト」という名は、油注がれた救い主なる

神という意味になります。

子なる神を「主イエス・キリスト」と告白することは、私たちの信仰の中心です。聖書は「主イエス・キリスト」を啓示し（ヨハ五・三九、Ⅱテモ三・一五）、私たちはこの方を通してのみ、御父を知り、御父と交わることができるのです（ヨハ一四・六、七）。

2 八まことの神、まことの人である▽

子なる神が「主イエス・キリスト」であることを明確にする規定は、この方が「まこと」の神、まことの人であるという告白です。キリストは、ご自分を神であると主張され（ヨハ五・一八）、それを証明するしるし（奇跡）を行なわれました（ヨハ一四・九〜一一）。主は嵐を静め、死人を生き返らせ、病気をいやし、そしてご自身が死から復活されました。これらはキリストの神性の現われです。しかし一方では、主は肉体を持ち、働き、飲食し、疲れ、眠り、涙を流し、試練に苦しみ、最後は十字架で血を流して死なれました。これらは、主が人性を持つておられたことの証拠です。

では、キリストの神性と人性はどのような関係にあるのでしょうか。これについて数々の見解が生まれてきました。それらを大別すると、キリストの神性と人性のどちら

か一方を重視して他方を軽視、または否定する見解に分かれます。一世紀後半の仮現説は、人間イエスは幻影にすぎないと唱えて、主の真の人性を否定しました。二世紀のエピオン派は、イエスはバプテスマを受けた時に神になり、十字架刑のまえに人間に戻つたと教えました。これはイエスの神性の否定です。アリウス（四世紀）は、キリストを最高の被造物とみなしました。これもキリストの神性の否定です。アポリナリス（四世紀）は、イエスの霊は神的ロゴス（ヨハ一・一、一四の「ことば」）に置き換えられ、そのロゴスがイエスの心とからだを支配したと考え、イエスを霊のない不完全な人間にすることによつて、イエスの人性を否定しました。アンテオケ学派（四〇五世紀）は、ことば（御子）はイエスの肉を養子にしてそこを住み家にしたただけだと説明し、イエスを神を担い、神を宿す人とみなしました。これはキリストの神性の否定です。同時代の後期アレキサンドリア学派は、受肉によつてキリストの人性は神性の中に吸収されて消え、弱く罪深い肉体は神化されたと主張し、キリストの人性を否定しました。

これらの諸説の波にもまれながら、教会は紀元四五一年にカルケドンで開催された教会会議で、聖書に基づく二性一人格の教理を正統的教理として最終的に採択しました。これがキリスト論問題の最終的解決であるとされるカルケドン信条です。この信条には、「神性において完全であり、同時に人性において完全である同一の御子、われらの

主イエス・キリスト……。主は真実に神であり、また人である。……。ひとり子は二性から成り、この二性は混乱もせず、転化もせず、分割もせず、分離もしないもの……。この二性の区別は一つになったことよって少しも除去されることなく、かえっておのおのの特性は保持され、一つの人格と一つの存在に合体し、二つの人格に分離もされず、同一の御子、ひとり子、言なる神、主イエス・キリスト」とうたっております。この内容を次のように要約することができます。

①受肉によつて、キリストの御父と同質の神性はいささかも失われたり、損なわれたりすることなく保たれた。②キリストの人性は、罪をほかにしては私たちの人性と同質であり、被造物である人としての弱さを帯びていた。③キリストの人格は神的人格だけである。キリストの人格は受肉によつても変化しなかった。

私たちは、このような理解をもつて、キリストは「まことの神、まことの人である」と告白しているのです。

3 ^主は聖霊によつてみごもつた処女マリヤより生まれ▽

御子は聖霊によつてマリヤの胎に宿り、マリヤから人性をとることよつて「まことの人」となられました。処女降誕（正確には処女懐妊と表現するほうがよい）の教理の

聖書の根拠は、マタイ一・一八〜二五とルカ一・二六〜三八です。両方とも次のことを強調しています。処女降誕は、①人間理性の理解力を越えた奇跡、②聖霊のみわざ、③旧約聖書の預言の成就（Ⅱサム七・一二〜一六、イザ七・一四、九・六、七）である。

処女降誕の教理はこれまで、その神秘性と超自然性のために、多くの人のつまずきとなってきました。しかし、この出来事をマリヤから直接取材して書いたルカは、当時の有能な医者であり歴史家であったことを忘れてはなりません。彼は、イエスの生涯を初めから終わりまで「綿密に調べた」（ルカ一・三）結果、処女降誕が医学的、生物学的説明を要しない聖霊による神の奇跡であることを確信して、福音書に書き留めたのです。

カトリック教会は、処女降誕についての聖書の証言を踏み越えて、処女マリヤに関する奇妙な教理を作り出しました。それによると、マリヤは母の胎内に宿ったときから原罪を免れており、また、死んで後すぐに肉体の復活にあずかって、天に引き上げられ、今すべての信者の霊的母としてとりなしている、と教えています。この教えには聖書の根拠は全くありません。マリヤは、御子の受肉のために神に用いられた普通の女性であって、私たちと同じ罪人でした。また、彼女だけが特別な人として、すでに肉体の復活にあずかっているわけではありません。

4 へすべての人の罪のために十字架にかかり

キリストの誕生に関する告白の後は、すぐにキリストの最後に関する告白になります。キリストの最後は、当時のローマ帝国公認の最も残酷な死刑手段であった十字架刑による死でした。

キリストが罪のないお方であったことは、パウロもペテロもヨハネも、ヘブル書の記者も証言しています（Ⅱコリ五・二二、Ⅰペテ二・二二、Ⅰヨハ三・五、ヘブ四・一五）。しかし主は、ユダヤ人のねたみによって訴えられ、異邦人ピラトの不正な裁判によって、当時の世界を代表するローマ帝国によって十字架につけられました。この世がキリストを殺したのです。

しかし、主の十字架には、「私たちの罪のために死なれた」（Ⅰコリ一五・三）という別の側面があります（ガラ一・四、Ⅰペテ二・二四）。主は、「多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与える」ために来たと言われました（マコ一〇・四五）。主は十字架の死を弟子たちに予告し、その時を「わたしの時」（ヨハ七・六）と表現されました。主は、私たち罪人の代表者として神のさばきを受け、私たちの罪の身代わりとなることを神のみこころとして受けとめておられました。こうしてキリスト

は、その時が来た時、罪人の身代わりとして十字架にかかり、神の怒りを受けて死なれました。これは、神が昔から計画し（使二・二三）、旧約の民に約束しておられた救いの成就でした（創三・一五、イザ五三章）。この救いは、贖い、解放、自由、罪の赦し、和解、平和、義認、子とされる、相続するなど、多様なことばで表現されています。

5 〆死に、葬られ〷

十字架につけられておよそ六時間後、キリストは息を引き取られました。罪人の代行として、罪のない方が罪の支払う報酬としての死をわが身に引き受けられたのです（ロマ六・二三）。そして墓に埋葬されました。埋葬は、キリストが確かに死なれたこととしるしです。

聖書は、死の本質を生ける神との交わりから断たれることにあると教えています。人間にとって死が恐怖になっている根本的理由がここににあります（ヘブ二・一五）。主はこの恐怖を、もたえ苦しみながら祈られたゲッセマネで予感しておられました（ルカ二二・四四）。そして事実、十字架の上で、この極限の苦悩を耐え忍ばれたのです（マタイ二七・四六、マコ一五・三四）。

私たちは使徒信条において主キリストを「死にて葬られ、陰府にくだり」と告白しますが、これはキリストが死後に更に想像を絶する苦しみをいわゆる地獄でお受けになったと言おうとするものではありません。この「陰府にくだり」は聖書の直接的ことばに基づくものではなく、使徒信条に元来はなく、後の時代に追加されたものです。

「陰府にくだり」に大切な意味を込める主な立場として、

① 陰府でのキリストの勝利宣言とする立場(*1)、

② 十字架の上あるいは十字架以前のキリストの魂の苦悩を指すとする立場(*2)、

③ キリストが死の支配の力に服されたとする立場(*3)

があります。聖書は、キリストは贖いのわざを成し遂げた平安と、死の縄目を打ち破っていのちに戻るといふ確かな望みの中で息を引き取られ、墓に葬られたことを示しています(使二・二四〜三二)。

注*1 カトリックの第4回トレド教会会議(DS 485 「聖人たちを解放するために古聖所にくだり」)、『和協信条』9条(「陰府にくだり」がキリストの死の前か後かと論じることをルターに倣って避ける)

注*2 カルヴァン『キリスト教綱要』第二篇16章、『ハイデルベルグ信仰問答』44

注*3 『ウエストミンスター信仰告白』8章4、『ウエストミンスター大教理問答』50

6 〆三日目からだをもつてよみがえり 〱

キリストの「三日目」の復活は、聖書に従った出来事でした（Ⅰコリ一五・四）。主ご自身も「三日目」の復活を予告しておられました（マタ一二・四〇、参照ヨナ一・一七、ルカ二四・四五、四六）。また主は「からだをもつて」復活されました（ルカ二四・三九）。復活のからだには釘の跡があり（ヨハ二〇・二七）、主はそのからだで食事も取られました（ルカ二四・四三）。ただそのからだは、以前の「弱さのゆえに十字架につけられた」（Ⅱコリ一三・四）からだとは異なる、新しい「栄光のからだ」（ピリ三・二一）でした。

処女降誕と同様、キリストの復活の歴史性を疑問視する人々がいます。しかし復活を信じない人でも認めなければならない二つの事実があります。一つは、空になった墓、すなわち、イエスの死体が消えた事実です。もう一つは、隠れていた弟子たちが殉教をも恐れない大胆な宣教師へ突然変化したことです。これを説明するために、イエスの仮死説、蘇生説、死体盗難説、幻覚説、信仰による復活説などが考えられました。しかし、どれも十分な説明ではありません。唯一の妥当な説明は「（主は）ここにはおられません。よみがえられたのです。」（ルカ二四・六）という御使いのことばです。主は「数多くの確かな証拠をもって、ご自分が生きていることを使徒たちに示された。」

(使一・三) のです。

主の復活は、福音に不可欠な部分になっていきます(Ⅰコリ一五・一〜四)。その重要性は、「使徒たちは、主イエスの復活を非常に力強くあかしし」(使四・三三)とあるとおり、彼らの初期の宣教の中心的使信がキリストの復活であったことからわかります。パウロも、もし主の復活がなかったら、キリスト者の信仰はむなしく、罪からの救いもないと考えていました(Ⅰコリ一五・一七)。主の復活には次のような重要な意義があります。①復活は、キリストが真の神、万物の主権者であることの証明(マタ二八・一八、ローマ一・四)。②復活は、十字架の贖いの十全性の保証(ローマ四・二四、二五、ヘブ七・二七)。③復活は、主が、信じる者を新しい生命に生かしてください。④復活は、信じる者が将来、復活することの保証(Ⅰコリ一五・二〇〜二二、ピリ三・二一)です。

7 天に昇り、今、神の右に座し、私たちのために大祭司の務めをしておられる V

復活の後、四〇日間弟子たちにお現われになったキリストは、受肉以前に持っておられた栄光を御父のもとで回復するために、地上を離れて天に昇られました(ルカ二四・二六、五一、使一・九)。主はそこに再臨の時までとどまられます(使三・二一)。

天において、神の右に着座された主は、御父から万物を治める権能を受けられました（エペ一・二〇～二二）。その権能に従って主は、信じる者たちの群れに約束の聖霊を注がれました（使二・三三）。主は聖霊によって、今も神の国を拡大しておられます。天における主のもう一つの大きな働きは、大祭司としての務めです（ヘブ四・一四、八・一、二）。復活したからだに、十字架につけられた釘の跡を残しておられた主は、その贖いによって主との新しい契約に入れられた私たちをいつも覚えておられます。私たちの弱さも、信仰の戦いも主は知っておられます。そして主は、あわれみ深い、忠実な大祭司として（ヘブ二・一七）、私たちのためにとりなしておられます。死んで、よみがえられた方の有効なとりなしによって、私たちの罪は赦され続け、救いは完成されます（ロマ八・三四、ヘブ七・二五）。

8 ^やがて、みからだをもつて再臨される V

この個所の解説は、「終末」の項の解説を参照。

五 「聖霊なる神は、人格を持ち、罪と義とさばきについて人にその誤りを認めさせ、新しく生まれさせ、キリストに結びつけ、救いの保証となられる。聖霊はすべての聖徒に内住し、聖化し、助け主、教師、導き手として働かれる。」

1 ∧聖霊なる神は▽

聖霊は神であられ、三位一体の第三位格であられます。ペテロはアナニヤに対して「あなたはサタンに心を奪われ、聖霊を欺いた」（使五・三）と言ったあと、続いて「あなたは人を欺いたのではなく、神を欺いたのだ」（使徒五・四）と言い、聖霊を神と呼んでいます。

聖霊の名称についても、神の霊（創一・二、Ⅱ歴一五・一）、主の霊（イザ一・二）、神である主の霊（イザ六一・一）、父の御霊（マタ一〇・二〇）、神の御霊（マタ一二・二八）、イエスの御霊（使一六・七）などと呼ばれ、聖霊が神であられることを示しています。

また、聖霊は、永遠性（ヘブ九・一四）、全知性（Ⅰコリ二・一〇）、全能性（ルカ一・三五）、遍在性（詩一三九・七）など、その神的属性において、父なる神、子なる神と同等のお方です。

2 人格を持ち

聖霊は、知性（Iコリ二・一一）、感受性（イザ六三・一〇、エペ四・三〇）、意志（Iコリ二・一一）という人格の本質のすべてを備えておられます。

更に、聖霊は、人格性にふさわしい働きをされます。すなわち、啓示し（Iコリ二・一〇）、語りかけ（使八・二九、一三・二）、教え（ルカ一二・一二）、思い起こさせ（ヨハ一四・二六）、あかしし（ヨハ一五・二六）、知らせてくださいます（ヨハ一六・一三、一四）。

聖書が聖霊を火（使二・三、四）、水（ヨハ七・三七、三九）、油（Iヨハ二・二〇、二七）などにたとえて、象徴的に表現していることを間違って解釈して、聖霊を感化力、エネルギー、雰囲気のようにしか考えない人たちがいます。例えば「ものみの塔」の人々は、聖霊の神性や人格性を否定して、聖霊は神の活動力にすぎないと教えています。けれども聖書は、イエス・キリストのことも、光（ヨハ一・四、九）、いのちのパン（ヨハ六・三五）、ぶどうの木（ヨハ一五・一）などと象徴的に表現しています。聖書を曲解しないよう注意しなければなりません。

3 罪と義とさばきについて人にその誤りを認めさせ、新しく生まれさせ、キリストに結びつけ、救いの保証となられる▽

聖霊は、人を救いに導くために働いてくださいます。人は、罪のゆえに、神についても、自分自身についても正しく知ることができません。世間一般では、罪とは盗み、偽り、殺人などのことと考えるだけです。聖霊が働いてくださることによって、人は、罪とは何かについて正しく知ることができるようになります。すなわち、罪の本質が神への不信仰、不従順、神のみこころに逆らういっさいのことであることがわかり、また、自分自身が罪人であり、神に逆らってきた者であることが聖霊によって知らされます。そのように、人が自分の真の姿に気づかされ、認めさせられるのは、全く聖霊の恩です（ヨハ一六・八、九）。

また聖霊は、人をキリストに導いてくださいます。人がキリストの十字架の意味を知り、キリストの救いの完全さがわかるようになるのは聖霊の働きによつています（ヨハ一六・一四）、また聖霊は人にキリストを信じる信仰を与え（エペソ一・二三）、新しく生まれさせ（ヨハ三・三、五、六）、永遠のいのちを与えてくださいます（ヨハ六・六三）。新しく生まれるということは「上から生まれる」すなわち、神によつて生まれ、神の子とされるということです（ヨハ一・一二、一三）。

聖霊は、新生した人をキリストに結びつけ、キリストのからだである教会の一員にしてください。同じ御霊を受けた者として信者はみな一つにされ（エペ四・四）、御霊によって神の御住まいとなるのです（エペ二・二二）。

聖霊はまた、新生した者が、永遠に神に属している者、確かに救われた者であることの保証として、信者のうちに住んでください（エペ一・一三、一四）。

4 ∧ 聖霊はすべての聖徒に内住し ∨

旧約時代には、聖霊は特別な働きのために、王や預言者のように特別な人々の上に注がれました。また、一旦、注がれた聖霊がその人から去って行かれることもありましたが（士一四・六、一六・二〇）。

しかし、ペンテコステの聖霊降臨の出来事以来、聖霊は、キリストを信じるすべての者のうちに住んでください（ロマ八・一一）。聖霊は、人が福音を聞いてキリストを信じた時に、その人のうちに住まわれます（エペ一・一三）。そのことを聖霊によるバプテスマと言います（Iコリ一・二・一三）。

聖霊によるバプテスマは一回限りの経験です。その後、聖霊は信者のからだを聖霊の宮（Iコリ六・一九）として、臨在し続けてください。

聖霊によるバプテスマと聖霊に満たされることとは別のことです。聖霊に満たされることは、信者が継続して、繰り返し経験することです（エペ五・一八）。聖霊に満たされるということは、更に多くの聖霊を受けるということではなく、聖霊が、信者の生活と人格のあらゆる領域を導き、支配し、影響を与えられることを意味します。信者は、聖霊に満たされて歩む時、聖霊の力を受けてキリストをあかしし（使四・三一、六・一〇）、また聖霊の実を豊かに結ぶようになります（ガラ五・二二、二三）。

5 ∧聖化し∨

聖化とは、聖霊の恩恵的、連続的働きであって、聖霊が信者を罪の汚れからきよめ、その人格をキリストに似たものへと近づけ、良い行いに歩むようにしてくださることで（Ⅱコリ三・一八、エペ二・一〇）。

キリストの救いにあずかった者は、確かにその罪を赦され、神の子とされ、永遠のいのちを受けていますが、しかし同時に、肉体の弱さと罪深さを伴っている赦された罪人です。ですから、信者のうちには絶えず霊と肉の戦いがあります（ロマ七・一五〜二三）。この戦いは、キリストの救いにあずかっている者だけが経験するものです。

聖霊はそのような信者をキリストに似たものへと変えていってくださいます。聖霊

は、信者の内なる人を強くし（エペ三・一六）、信者が自分のからだをもつて、神の栄光を現わすように助けてくださいます（Iコリ六・一九、二〇）。

信者は聖霊の助けによって、知的にも、感情的にも、意志的にも取り扱われて、神の子にふさわしく考え、喜び、行動するように変えられてゆきます。聖化のみわざがなされてゆくために、信者は、聖霊の導きに従順であることが求められます（ガラ五・一六、二五）。聖書は、聖霊の導きに従っている信者を御霊に属する人と呼び、聖霊に逆らっている信者を肉に属する人と呼んで、すべての信者が御霊に属する人であるように勧めています（Iコリ三・一）。

聖霊はみことばによって聖化のみわざを進めてくださいます。信者が聖書を読む時、聖霊がみことばによって心を探り（Iコリ二・一〇）、罪を指摘してくださいます。また、日常生活の中でも、聖霊が心の中にみことばを思い起こさせて語ってくださいます。ですから信者は、みことばを離れた何かの体験をいたずらに求めたりしないで、みことばを学び、みことばを通して語られる御霊の導きに従順であるように努めることが大切です。

信者が聖霊の導きに従順である時、聖霊は信者のうちに御霊の実を結ばせ（ガラ五・二二、二三）、神の栄光を現わすものとしてくださいます。そのような聖化は、漸次な

されてゆくものであり、罪を犯さない性質が瞬間的に信者に与えられるのではありません。信者は地上にいる限り、自分の弱きや不完全さを身に負いつつ、聖霊によって、少しずつ、継続的に、神の子にふさわしく変えられ、成長してゆくのであり、常に罪との戦い、罪の告白（Iヨハ一・九）、祈り（エペ六・一八）が伴います。

6 へ助け主、教師、導き手として働かれる

聖霊は助け主として（ヨハ一四・一六、一七、二六）、常に信者と共にいてくださいます。迫害で苦しめられる時には聖霊が語るべきことばを教えてください（マタ一〇・一九、二〇）、どのように祈ってよいかわからない時には聖霊が祈りを導いてくださいます（ロマ八・二六）。

聖書を靈感された聖霊は、信者が聖書を正しく理解できるように、聖霊の照明を与えて教えてください（ヨハ一四・二六、一六・一三）。聖書を学ぶ時の最も良い教師は聖霊です。

また聖霊は、教会が宣教の使命を果たすように励ましてください。キリストは、臆病であった弟子たちに「聖霊を受けよ」と語られ（ヨハ二〇・二二）、また、聖霊の力によってキリストの証人としての使命を全うするように命じられました（使一・

八)。初代教会が、激しい迫害の中でも大胆に宣教の働きを進められたのは、聖霊の励ましによつています(使二・三三、四・八、三一、九・三一)。聖霊は、キリストの救いにあずかった者がこの世においてキリストの証しをするために、力を与えて励ましてくださいます(Ⅱテモ一・七)。

聖霊は信者に聖霊の賜物を与えてくださいます。聖霊の賜物には、慈愛、信仰、知恵、知識、助けることなどいろいろの種類があつて(ロマ一二・六、一、Ⅰコリ一二・四、一、Ⅰペテ四・一〇、一一)、聖霊がみこころのままに、信者おのおのに分け与えてくださいます。

異言やいやしの賜物については注意深くある必要があります(Ⅰコリ一四・二、一、九)。使徒時代には、聖霊降臨の確かさを明白にするために、しばしば異言やいやしの賜物が發揮されてきましたが、聖書の啓示が完結している今日は、異言よりもみことばの説き明かしである預言のほうが大切に重視されています(Ⅰコリ一四・五、一八、一九)。

聖霊によるバプテスマを受けた証拠として、信者はすべて異言を語ると教えるカリスマ運動の人々もいますが、聖書はそうのように教えていません。聖霊は、キリストを信じるとすべての者に内住され、すべての信者に聖霊の賜物を分け与えてくださいますが、す

べての信者に異言の賜物が与えられるのではありません（イコリ一・二・三〇）。また、異言の賜物が他の賜物よりすぐれていることもありませぬ（イコリ一四・五、六）。むしろ、異言を話すことよりも預言することを、熱心に求めるよう勧められています（イコリ一四・一）。

六 「人は神のかたちに創造されたが、父祖アダムがサタンの誘惑により神の戒めを破り、罪を犯したため神との交わりを断られた。その結果、人は罪の性質をもって生まれ、その思いも言葉も行為も罪ある者となった。それゆえ、すべての人は霊的な死と肉体的な死の下におかれ、永遠のさばきに定められている。」

1 人は神のかたちに創造されたが

①人の創造

人の起源について、聖書は明確に、神の創造によると教えています（創一・二七）。世間一般では、人の起源は進化によるとするのが当然のようにみなされていますが、進化論が仮説であることを忘れてはなりません。確かに、様々な発掘物によって進化論を裏付ける努力がなされていますが、現実に存在しているあらゆる事物の多様性、ことに動植物の「種」の大きな隔たりは、進化論の不合理性を明らかにしています。被造物の多様性と緻密性は、創造の神の偉大さを示しています（ローマ一・二〇）。神は、動植物を「その種類にしたがって」創造され、人を、神に似た独特のものとして創造されました（創一・二六、二七）。人は決して進化の産物ではありません。

神は、土地のちりて人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き入れて、人を肉体と靈魂

を持つ者として創造してくださいました（創二・七）。人の構成について、肉体と靈魂から成るとする二分説（ロマ八・一〇、Iコリ五・五、コロ二・五）と、肉体、たましい、靈から成るとする三分説（Iテサ五・二三、ヘブ四・一二）があります。どちらが正しいと断定することは困難です。いずれにしても、肉体と靈魂は切り離すことのできないものであつて、靈肉を分離する二元論は聖書の教えではありません。

神は、人を男と女に創造されました。それは、人が、男と女の交わりを通して、神が人を愛してくださり、人が神に信頼することを学び、また、教会のかしらであるキリストが教会を愛してくださり、教会がキリストに従うことを知る具体的な象徴として与えられています（エペ五・二二〜三三）。

また神は、神に代わつてこの被造世界を統治管理する使命を人に与えられました（創一・二八）。創造後の世界は、神の主権の下に保持されつつ、人の管理下に置かれています。

それゆえ、人の本分は、みずからが被造物であることを覚え、創造者なる神を喜び、賛え、神のみこころの中に生きて、神の栄光を現わすところにあります（イザ四三・七）。

②人は神のかたち

他の被造物と全く異なる人の特質は、人が神のかたちに創造されたところにあります（創一・二六、二七）。神のかたちとして、人には、まず、知恵、知識、意志の力、感情的なことなど、人の人格の重要な要素と関連しているものが与えられています（コロ三・一〇）。言い換えれば、人が神のかたちに造られたゆえに、人は言語能力、知識、意志する力、行動力を持つています。人は、その与えられている能力によって、神が人に知らせようとしておられることを知り、神を愛し、神に従うことができ、また、あらゆる事物を正しく知り、判断し、この被造世界を統治管理できるようにされています。

また、人には、神のかたちとして義と聖が与えられています（エペ四・一二、一四）。義と聖は、神が聖くあられるようにみずからを聖く保って、神との交わりを重んじようとする品性のことです。人に義と聖が与えられていることにより、義であり聖である神との交わりが可能なのです。

また、人には霊が与えられています。ただし、人に与えられている霊は、神によって創造された人としての霊であって、霊なる神の一部が人に与えられているではありません。

2 父祖アダムがサタンの誘惑により神の戒めを破り、罪を犯したため神との交わりを断たれた▽

① サタンの誘惑

サタンはもともと、天使として創造されましたが、神のようになるうとする高慢の罪によって、神に逆らう者となり、その立場から追放されました（イザ一四・一二―一五）。アダムは、サタンに誘惑されて神のことばを疑い、不信仰に陥り、ついにはサタンのことばを信じて罪を犯してしまいました（創三・一―六）。サタンは、竜、古い蛇（黙二〇・一二）、偽りの父（ヨハ八・四四）などと呼ばれ、時には「ほえたけるししのように」（Ⅰペテ五・八）、時には「光の御使いに変装して」（Ⅱコリ一・一四）、人を罪に誘惑します。

けれども、キリストが十字架において、罪と死の解決をし、サタンの頭を砕いてくださったことにより、キリストを信じる者は、キリストによって、サタンに勝利することができます（ルカ一〇・一八、コロ二・一五、ヤコ四・七）。

② 父祖アダムの墮落と罪の侵入

罪とは本質的に、神に逆らうことを言います。確かに対人関係における罪もあります。が、それらは神に対する罪の結果にすぎません。根本的な罪は、神への不信仰、神をぬ

きにして的はずれに生きること（ギリシャ語の罪を表わすハマルティアは的はずれの意）、勝手に横道にそれて迷子になること、神への不従順など、神との関係におけるものです。

アダムは善悪の知識の木の実を前にして、神への不信仰、不従順に陥って、木の実を取って食べ、罪を犯してしまいました。

アダムの罪は、アダムひとりにとどまらず、彼の子孫である全ての人を罪人とすることなりました（ロマ三・二三、五・一二）。というのは、神とアダムとの契約は、アダムとその子孫、すなわち全人類にかかわる契約であり、アダムはその代表であるからです。それで、アダムが罪を犯したことによって、必然的に全人類が罪人としての性質を持つことになりました（ロマ五・一八、一九）。ちょうど一本の根からの枝のように全人類は、アダムの子孫という種子的、生物的関連を免れてはいないのです。

③ 神との交わりを断たれた

アダムは罪を犯したその時、即座に、神から身を隠し、神との交わりが断たれました（創三・八）。しかし神は、身を隠したアダムに呼びかけ（創三・九）、救い主の約束（創三・一五）を与えてくださると同時に、罪へのさばきを宣告されました。ここに神の義と愛があります。

アダムの罪によって、地上のあらゆる苦しみ、痛み、矛盾、争い、死など（創三・一六～一九）がこの世界にもたらされました（ロマ八・一九～二二）。いっさいの悪の原因はアダムの罪にあるのであり、決して、神がもたらされたものではありません。神はすべての良い贈り物、また、すべての完全な賜物を与えてくださり（ヤコー・一七）、神に敵対する者をも愛してくださるお方です（ロマ五・六～一〇）。

3 ^ その結果、人は罪の性質を持つて生まれ V

アダムの墮落の結果、その子孫であるすべての人は、生まれながらの罪人です（エペ二・三）。アダムの一つの罪が全人類に転嫁され、すべての人は罪と死を身にまとって生まれて来ます。

それゆえ、人は生まれつき、本来与えられていた神のかたちとしての真の知識を失い、その理性だけで神を知ることが不可能となり（エコー一・二〇、二一、その意志は常に神に逆らい、その感性は自己中心的となっています）。

義と聖は全く汚れ、聖さよりも汚れを愛する者として、また、靈性は死に、神を求めるところも神に正しく応答することもできない全く墮落した罪人として、人は生まれてきます。

4 ∧その思いも言葉も行為も罪ある者となつた∨

人は、罪人として生まれただけでなく、みずから罪を犯す罪人です（ロマ三・二三、七・一四）。罪人であるから罪を犯し、罪を犯すことによって罪人であることが一層明白になります。

罪とはなにか、人がいかに罪深いかを示すために、神は律法を与えてくださいました（ロマ五・一三、二〇、ガラ三・一九）。その代表的な十戒のうち、一戒から四戒までは神との関係の罪、五戒から十戒までは対人関係及び自分自身に関する罪が戒められています。これらの律法に照らしてみれば、すべての人が罪人であることが明らかです（ロマ三・二〇）。

イスラエル民族の歴史は、一面、神の愛を裏切る罪のみにくさを示しています。イスラエルは、神に選ばれ、神に愛されているにもかかわらず、不信仰、不従順を繰り返し、愚かにも、キリストを十字架にかけて殺害し、盲目的で反逆的ですが、その姿は、そのまま全人類の実状を示しています。

人は罪を解決する力を持っていません。罪を犯すことによつて自分自身を汚れた者、無力な者、むなし者、愚かな者としています（ロマ一・二一〜二四）。しかも、そのような生き方を是認しているのです（ロマ一・三二）

5 ∧ それゆえ、すべての人は靈的な死と肉体的な死の下におかれ、

罪を犯したアダムに、神は警告のことばのとおり、死の宣告を与えられました。死は罪の結んだ実です（ロマ五・一二、六・二三）。死には肉体の死と靈魂の死があります。死とは断絶を意味します。神との交わりの断絶は靈的な死です。靈的に死んだアダムの子孫である全人類は、肉体は生きていても、靈魂は神との交わりを断たれた靈的に死んだ者としてこの世に誕生します（エペ二・一）。

肉体の死の時、肉体と靈魂は分離し（創三五・一八、使七・五九）、肉体はちりに帰り、靈魂は死者の世界*に行きます。また、あらゆる被造物の死も、アダムの罪の結果として、この世界に入って来ました（ロマ八・一九〜二二）。

注* 死者の世界 《 死者が終末のさばきを待つ間の中間状態 》

すべての死者の行先を旧約聖書はシエオル（陰府「よみこ」と呼びます。シエオルは生活の場から離れた場です。それゆえ死は悲しみをもたらしますが、旧約聖書は義人はよみがえらされて永遠のいのちを与えられると希望を語り、悪を行う者はよみがえらされて永遠の嫌悪を受けると警告します（ダニ一二・二）。この意味で死者の場シエオルは一時的な場です。

この一時的な場シエオルの訳語としての「ハデス」が新約聖書で用いられる場合、そのハデスは、「死者が終末のさばきを待つ間の中間状態で置かれる所」（新改訳聖書二版・三版あとがき）であり、苦しみの場所の意味はありません。

しかし同時にキリストは、神のことばに今聞き従うことの大事さを言う際に、死者の場シエオルを二つに分け、その一つをハデスと呼び、生きていた間に神のことばに聞き従おうとしなかつた者が、神と断絶して生きた結果を自意識をもってハデスで苦しむ様子を表現しています(ルカ一六・二二～二六)。この意味でのハデスは終末のさばきで永遠の苦しみの場所・燃えるゲヘナ(「地獄」)が登場するまで罪人が一時的に置かれる苦しみの場所となります。そこでどのように後悔しても、もはや苦しみの場所から移ることができないことをキリストは表現しています。

もう一つの死者の場が「アブラハムのふところ」です。そこは神のことばを信じて聞き従った者たちが死後に神の恵みと憩いにある場です。「アブラハムのふところ」とハデスとは大きな淵で隔てられていとされまます。キリストは十字架の上で、イエスを信じた罪人に「あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」(ルカ二三・四三)と語られました。ここから、その信じた罪人を伴いキリストが死後に行かれたパラダイスは「アブラハムのふところ」と重なるように思われます。救いの希望を持つ者が死後に死の縄目のもとにありながら復活を待つ幸いな一時的場をキリストは、永遠の祝福を先取りするようにパラダイスと呼ばれたのです。そのパラダイスを使徒は天の領域としても語っています(二コリ一・四)。

6 永遠のさばきに定められている▽

神は義なる方で、罪を憎み、罪人をさばかれます(ヘブ九・二七)。神のさばきは公平で(一ペテ一・一七)、各人の行ないにに応じてさばきがなされます(黙二〇・一一、一二)。「終末」の項の解説を参照。

七「人は神の選びを受け、キリストを信じることによって、キリストの身代わりの死と復活のゆえに罪を赦され、義と認められ、死からいのちに移される。また、神の子とされ、御子に似た者へと変えられてゆく。ひとたび救われたものは決して失われることなく、永遠に保たれる。」

1 人は神の選びを受け、キリストを信じることによって▽

罪のゆえに滅びに定められているすべての人は、その苦境から抜け出すことができせん。神のみが人を救うことができるのです。

天地創造の前から、神は主権的な意志によって救われる人を選んでおられます（エペ一・五）。なぜ神がある人を救いに選ばれるのか。それは被造物である私たちには隠されていることで、わかりません（申二九・二九）。とにかく、人が救われるのはその人を救いに選ばれた神の意志による、ということを経書は啓示しています（ヨハ一五・一六）。

一方、信じる者が救われるということも聖書は明らかにしています（ロマ一〇・一〇）。私たち人間の側から見れば、信じる者が救われると言えるでしょう。しかし、人が信じるのは、神がその人を選んでおられ、みことばと聖霊によって召されたからです

(Ⅰコリ一・二・三、Ⅱテモ一・九)。その意味では、信仰さえも神から与えられたものだと言わなければなりません。

キリストを信じるといふことは、神を否定してきた罪を悔い改め、神のもとに立ち返ることです。父祖アダムの墮落以来、人は生まれながらにして神を神としないという態度を本質的な性向として持っています。誰ひとりとしてみずから神に立ち返ることはできません。しかし、神が救いに選び、みことばと御霊によって引き寄せられる人は、悔い改めて神を信じるに至るのです(ヨハ六・四四)。

また、キリストを信じるといふことは、キリストについて語られたみことばが真実であることを認め、信じる者に救いを与えるという約束を信じ(ヘブ一・一)、自分のためにいのちをも捨ててくださったキリストに信頼することです。言い換えるならば、みずからは救いを受けるために何もなしえない罪人であることを認めることです(ガラ二・一六)。

もし人が良い行ないによつて神に受け入れられようとするならば、その人は神の規準である律法のすべてを完全に守らなければなりません。その一つでも破るなら、律法全体を犯したことになるのです(ガラ五・三、ヤコ二・一〇)。もちろん誰ひとりとして律法を完全に守ることはできません。

2 へキリストの身代わりの死と復活のゆえに罪を赦され、義と認められ、死からのちに移される▽

義なる神が罪を罪としてさばくことなしに、罪人を赦されることはありません。そこで罪のない御子を罪人の代わりにさばくことによつて、神は罪人を赦そうとされました。ひとり子をさえお与えになったほどに、神は、人を愛しておられるのです（ヨハ三・一六）。

罪人の身代わりとして死ぬことは、人となられた神の御子でなければできないことでした。なぜなら、人でなければ人に代わつて死ぬことはできないし、みずからは罪に問われない者でなければ人の罪を代わりに負うことなどできないからです（Ⅰテモ二・五）。そして、御子は死からよみがえられることによつて、死に打ち勝たれました。キリストの復活は、十全な救いが完成されたことの保証です（Ⅱコリ四・一四、Ⅱテモ一・一〇）。

キリストのみわざの意味について、聖書は罪のためのいけにえ、なだめの供え物、贖いの代価などと表現して、解説しています。旧約時代には、大祭司は年に一度の贖罪の日に罪のためのいけにえの血を携えて至聖所に入りました。そこで血が流され

ることによって罪の贖いをするためでした（ヘブ九・二二）。キリストは大祭司として、しかもただ一度ご自身を罪のためのいけにえとするために、神の前に出られました。キリストが十字架の上でただ一度流された血は、人の罪のための完全な償いとなったのです。贖罪はキリストの死によって完成されました（レビ一六章、ヘブ九・六、二八）。

罪が贖われるという時、そこには二つの意味がこめられています。元来、贖うとは、売られて他者の所有となったものを代価を支払って買い戻すことを言いました（レビ二五、二七章）。キリストは罪の奴隷になっている人を解放するために、ご自分のいのちを「贖いの代価」として与えられたのです（マコ一〇・四五）。キリストのいのちという無比の代価が支払われたことによって、人は罪への隷属と死の恐怖から解放されるのです（ヘブ二・一四、一五）。

罪が贖われるということのもう一つの意味は、罪が償われ怒りがなだめられるということです（出二一・三〇「贖い金・償い金」、レビ五・六「贖いをする・なだめを行う」）。罪に対して聖なる怒りを持たれ、やがてさばきをくだされる神の前で、キリストは人の罪を償ってくださるのです。キリストはみずからが罪人に代わって神のさばきを受けられることによって、義なる神に人の罪を見過ごしていただくための「なだめの供え物」（ロマ三・二五、Iヨハ四・一〇）になられたのです。しかし、そのこと自体が父なる神の意

志であったということの中に、私たちは神の徹底した義と愛とを見るのです。

また、身代わりの死に至るまでのキリストの神への従順は、神の義の要求（律法）を完全に満たすものでした（ピリ二・八、ヘブ五・八〜一〇）。このキリストの神への従順による義が人に転嫁され、その結果、人は「価なしに義と認められるのです」（ロマ三・二四）。キリストが身代わりの死に至るまで神への従順を全うされたことによつて、信じる私たちは義と認められるのです。

また、キリストの身代わりの死と復活のゆえに、信じる者は死からいのちに移されます。キリストはみずからいのちを捨てられ、再びいのちを得られました。そして、その復活のいのちに私たちを生かしてくださるのです（ロマ六・四）。私たちはキリストにあつて新しく生まれ、新しく造られて神との交わりの中に、その祝福の中に生きる者とされます（ヨハ三・三、Ⅱコリ五・一七）。神の前に死んでいた者が生き返るのです。その新しいいのちは肉体の死によつて終わらない永遠のいのちです（Ⅰヨハ五・一一、一二）。

3 へまた、神の子とされ、御子に似たものへと変えられてゆく▽

義と認められた者は神の子とされる特権を与えられます（ヨハ一・一二）。奴隷が主

人の命令を完全に守らなければ主人に喜ばれないのとは対照的に、子供はその存在そのものが親に喜ばれています。完全な遵守を求める律法の下で戦々恐々としていた人は、不完全なままの自分がかげがえのない子供として神から愛されていることに驚かすおれません（ロマ八・一五、Iヨハ三・一）。さらに、子とされた者は父の財産を相続する権利をも与えられています。やがて完成される神の御国を、私たちは長子であられるキリストとともに受け継ぐことになるのです（ロマ八・一七、エペ一・一一）。

子が親に育てられるように、神の子とされた者も神によって育てられます。神が私たちを子とされたのは、私たちをご自身の聖さにあずからせるためでもありません（エペ一・四、五）。神は私たちに子としての身分を与えるだけでなく、その性質も神の子にふさわしいものに変えてゆこうとされているのです。私たちのうちに住んでおられる御霊が進められるこのみわざを、聖化と呼びます（ロマ一五・一六）。

神の子として新生した者は神によって養われ、みずからみことばに聴き、神の子として生活することによって成長してゆきます（Iペテ二・一二）。神の子とされた者たちは、みことばに表わされたみこころが正しく良いものだどわかり、それを喜ぶことのできる者とされています（ロマ七・一二、二二）。そのようにして神のみこころにかなう者へと私たちが変えられてゆくのは、御霊なる神のお働きです（エレ三一・三三、IIコ

リ三・一八)。「父のみこころを行なうことがわたしの食物です」(ヨハ四・三四)と言われた御子に似たものへと私たちは変えられてゆくのです。

このように神が私たちに働きかけてくださるのですから、私たちも神のみこころに生きることを望み、聖さを求めて生きるべきです(Ⅱコリ七・一、テト二・一四)。キリストによる救いは無償の罪の赦しですが、それが罪への放縦を生み出すことはありません。むしろ、神の子とされた者は罪の中にとどまり続けることができないのです。なぜなら、罪の性質はいまだ残っています、私たちはもはや罪に支配されることはいからです(ロマ六・一、二、一四)。

神の子とされた者は成長し、みこころにかなった良い行ないの実をみのらせてゆきま(ガラ五・二二、二三)。また、神は私たちが行なうべき良い行ないをもあらかじめ備えていてくださるのです(エペ二・一〇)。私たちがすることは常に不完全ですが、父なる神は成長してゆく私たちの行ないを喜んでくださいます。終わりの日には、その行ないに対して報いさえも与えてくださいます(マタ一六・二七)。

さて、私たちが神のみこころに従って歩もうとすれば、そう願いながらできない、という葛藤を経験します(ロマ七・一五、二三)。私たちの内に住みたもう御霊と、肉と呼ばれる罪の性質とが互いに対立するからです(ガラ五・一六、一七)。この世にある

限り、私たちはこの靈的な戦いを避けることはできません。また、父なる神は私たちの眞の成長を願って懲らしめたり、あえて試練の中を通されることもあるのです（ヘブ二・五〇一、ヤコ一・二〇四）。

やがて御子が再臨される時、私たちも御子と同じ栄光のからだに変えられ、聖化のみわざは完成を見ます。これを栄化と言います（ピリ三・二一）。そして、私たちのこの世での歩みに対して、神から報いと称賛と栄誉が与えられるのです（一ペテ一・七、黙二二・一二）。この決勝点をめざして、神の子とされた私たちは一心に走るのです（ピリ三・一〇一四）。

4 八ひとたび救われた者は決して失われることなく、永遠に保たれる▽

神の子とされた者も、この世においては誘惑や試練の中で罪に陥ることがありますが、ひとたびいただいた救いそのものを失うことはありません。罪を犯し、御霊を悲しませた時は、救いから落ちたのではないかと心配することなく、ただその「罪を言い表わす」ことによつて、その罪の赦しをいただければよいのです（一ヨハ一・九）。キリストも、ひとたび救われた者は決して失われないことを保証しておられます（ヨハ六・三七、三九、一〇・二八、二九）。これが一般に、「聖徒の永遠堅持」と呼ばれる教理で

す。

キリストを信じ、救いをいただいたことが神の選びという永遠のご計画によるならば、この救いの内に私たちは永遠に保たれるはずです（ロマ八・三〇）。私たちは御霊によって証印を押され、やがて御国を受け継ぐことの確かな保証も与えられています（エペ一・一二、一四）。また、キリストはいつも私たちのためにとりなしていてくださいます（ヘブ七・二五）。神によって始められた救いのみわざは神の力によって進められて、必ず完成に至るのです（ピリ一・六）。

これに対して、救われた者は生きている限り、恵みから落ちて自分の救いを失う可能性がある、と説くのがヤコブ・アルミニウス（一五六〇～一六〇九年）に端を発するアルミニウス主義です。アルミニウス主義は、「人の救いは神の主権的、絶対的意志による選びに基づいて、恵みによって付与されるものではない。神は誰が信じるかを前もって予知され、その予知に基づいて人を救いに選ばれた。従って、救いの基盤は、自分の意志による信仰によって神に応答する人間の善行にもあるのだから、救われた者が再び墮落した場合、当然その人の救いは失われる」と教えています。

1の人は神の選びを受け、キリストを信じることによってVについての解説からもわかるように、私たちの立場はアルミニウス主義の見解とは異なります。私たちは、聖

書は予知を選びと同じ意味で用いているので、神の選びは予知に基づくものではないと解釈します（ロマ八・二九、Iペテ一・一、二）。また聖書は、意志も含めて全的に墮落した人間は神の主権的意志によつて救いに選ばれ、信仰を与えられ、救われるのだから、救いの基盤は人間の側ではなく、神の恵みにある、と教えています（エペ二・八）。従つて、神によつて救われた者は神によつて永遠に保たれる、と理解するのが正しい聖書の理解であると私たちは信じます。

永遠堅持の教えを誤解して、ひとたび救われた者は永遠に保たれるのだから、私たちは罪を犯し、怠惰になつてもよいのだ、と考える人がいますが、それは決して聖書の教えではありません。聖書は、神は救われた者がキリストのことばにとどまり、最後まで忍耐をもつて信仰生活を歩みぬくことができるように保たれるからこそ、私たちはますます熱心に自分の救いの達成に励むべきである、と教えています（ピリ二・一二、三・一二〜一四）。私たちは神の力によつて支えられていることを感謝しつつ、「わたしにとどまりなさい」（ヨハ一五・四）とのキリストのみことばに従つてゆくのです。

八 「教会は、聖霊により召し出された者によって構成されるキリストのからだであり、そのかしらはキリストである。教会は礼拝を守り、聖礼典を執行し、宣教の使命を遂行して、主の再び来られる日を待ち望む。」

1 ∧教会は▽

一般に、教会は、「見える教会（可視的）」と「見えない教会（不可視的）」とに区別されてきました。前者は地上の歴史的諸教会を表わし、後者は人類創始以来、過去・現在・未来を通じてすべての選ばれた者によって構成されるキリストのからだ、すなわち、公同または普通の教会（エペ四・四、五・二五〜二七）を指します。しかし、使徒信条で「聖なる公同の教会・・・を信ず」とうたわれてるように、「見える教会」は「見えない教会」と同様に、かしらであるキリストに結び合わされたひとつのからだであるという意味において公同性を帯びた教会です。伝統的信仰告白も「見える教会は、福音のもとでは、やはり公同または普通の教会である」（ウエストミンスター信仰告白二五・二、一六四七年）と告白し、「見える教会」の公同性と普遍的性格をうたっています。イエス・キリストが、ご自身を「神の御子キリスト」とした告白の上に教会を建てる（マタ一六・一五〜一八）と言われ、その教会が天の御国の管理のために行なうこ

とは天においても認められている（マタ一六・一九）として、地上の教会が天の御国と同一領域内にあることを告げられたのは、地上の教会の公同性を確信させられる適切な根拠と言えます。ともすれば教会の尊厳性を軽視しがちな私たちにとってこの事実はしつかりと銘記しておくべきことと言えます。まさしく「教会は、真理の柱また土台」（Iテモ三・一五）なのです。

2 ^ 聖霊により召し出された者によって構成されるキリストのからだであり V

教会は神がイエス・キリストによって「救いに定めておられた」人々（エペ一・五）によって構成されています。聖霊は選ばれた者たちに信仰を与え（IIテサ二・一三）、彼らを結び合わせ（Iコリ一・二三）、教会を建て上げてくださいます。使徒信条において「聖霊を信ず」に続いて「聖なる公同の教会、聖徒の交わり」と告白するのも、教会が聖霊の働きに基づいていることを確認していると言えます。そのようにして建てられた教会を聖書は「キリストのからだ」（ロマ一・二四、五、Iコリ六・一五、エペ一・二三）と呼んで、教会がキリストと固く結びれていることを教えています。また、そのからだの肢体である者たちが互いに賜物を用いて仕え合い、支え合うことを命じています（Iコリ一・二・二五、二六、エペ二・一九）。宗教改革者たちが、「教会は聖

徒の交わり」であると告白したのもそうした根拠からです。教会が聖徒の交わりとして建て上げられるために、地上の教会には教役者及び種々の職務に就く者が立てられます（エペ四・一一～一六）が、それは上下関係ではありません。

ここで留意すべきことは、地上の教会では、間違った教えや偽りの入りこむのは避けられないという現実です。イエス・キリストは、麦と毒麦のたとえによって、麦と毒麦が完全分離するのはこの世の終わりを待たなければならぬことを教え、そうした事態を避け難いものと認めておられました（マタ一三・二四～三〇、四七～五〇）。初代教会も、エルサレム教会のアナニヤ、サツピラの事件（使五・一～一一）、コリント教会の紛争や分派（Iコリ一・一〇～一七）などの諸問題を抱えつつも、決して、地上の教会のあり方に消極的にはなりません。地上の教会を、見えない教会と全く同一視し、絶対化することは聖書の教えでは決してありません。と同時に、地上の教会が組織であることを否定するのも聖書の教えでは決してありません。キリストの教会の正しい姿を追い求める努力が積み上げられてこそ、「キリストのからだ」なる教会にふさわしいと言えます。

3 ^ そのかしらはキリストである V

教会のかしらは人ではなく、キリストです。聖書はこのことを「(キリストは) 教会のかしら」(コロ一・一八、エペ一・二二) であると呼びます。キリストの統治権は絶対で、みことばと聖霊によつて直接支配されます。神と人との間の唯一の仲保者はキリストであつて(一テモ二・五)、他の何者をも介入させるべきではありません。この点で、カトリック教会は、キリストと人間との間に教会を介入させ、教会にキリストの救いに道を開く権威があり、恵みを管理し、天国の諸聖人の功績を分与することによつて、救いを与える実権があるとしており、聖書の教えから逸脱しています。また、使徒ペテロからの使徒権を継承していると主張し、「司教の上に教会が立つ」(キプリアヌス、カルタゴ司教、三世紀) としてキリストの代理権を主張するローマ法王を教会のかしらとすることは、主観的な教会理解からくる誤謬と言わなければなりません。教会はキリストの直接支配を妨げるいかなる種類の地上的権威も退けて、王なるキリスト(マタ二八・一八、エペ一・二〇、二二) の支配に服さなければなりません。

4 教会は礼拝を守り、聖礼典を執行し、宣教の使命を遂行して

「礼拝・聖礼典・宣教」これらは教会の標識また務めです。そのために「教会が純粋な福音の教えを説いているかどうか、キリストが命じられたとおりの純粋な礼典を授けているかどうか、教会の訓練が悪徳を是正するために用いられているかどうか」（ベルギー信条二九条、一五六一年）ということが教会に求められます。それらを満たすことが、かしらなるキリストへの服従を具体的に表わすことになるのです。

「礼拝」とはこの場合、王なる神が直接召しておられる公的礼拝（主日礼拝）のことを指しています。新約時代以後、教会が「キリストのからだ」、「そのかしらはキリスト」と呼ばれているように、礼拝もおのずと復活の主イエス・キリストの仲保によって神を崇めることが目的であると言えます。そして、この復活の主の臨在は聖霊とみことばにおける臨在であり、それはみことばの説教と聖礼典において最もはっきりと示されるのです。礼拝には種々の要素がありますが、「説教」と「聖礼典」が礼拝の要になっているのは初代教会から宗教改革を経ての遵守すべき伝統と言えます。ですから、礼拝を人にとって魅力あるものにしようとして他の要素を強調し、この点が曖昧にされるのは、礼拝の本質を損なう危険性につながると言えます。

「説教」は、語られるみことばによって、神が、礼拝の民を支配、養育することを目

的としています。それはパウロによると「人間のことばとしてではなく、事実どおりに神のことばとして」（Ⅰテサ二・一三）語られ、受け入れられることよってなされてゆきます。そのためには、説教者が神の主権に全面的に服し、聞く人々も神の主権に服することが求められています。そして、それは聖霊の助けによって可能になります。これこそ聖霊とみことばと教会とが一つになった神の支配される教会です。

「聖礼典」によって表象されるものは、キリストと信者との聖霊による結合です。バプテスマは、信者がキリストにつき木されたことを象徴し、新生と聖霊の内住の経験を外側に表わす「しるし」と言えます（使一〇・四四〜四八）。キリストとともに死に、葬られ、よみがえりのいのちにあずかっていることを、水を通ることによって身をもつて証しする時でもあります（ロマ六・四、五、コロ二・一二）。聖餐は、パンとぶどう液が文字通りキリストのからだや血に変化するわけではありませんが、それらを受けるその時、十字架のイエス・キリストによって信者が贖われていることを深く覚えることのできる機会と言えます。すなわち、信者がイエス・キリストのいのちをいただいており、また、イエス・キリストご自身のいのちに結び合わされていることを、この礼典を通じて象徴的に知る時なのです（マタ二六・二六〜二八、ヨハ六・五三）。それは同時に、裂かれる一つのパンがキリストのからだを象徴するように、キリストの教会は一つ

であること、信者はキリストのからだである教会の肢体であることを確認する機会でもあるのです（Ⅰコリ一・二三〜二五）。

聖礼典は、主なる神が私たちの信仰の弱さを支えるために与えてくださった恵みの手段として受け、保つことが教会に必要です。

「宣教」については、「あらゆる国の人々に」（マタ二八・一九、ルカ二四・四七）、「出て行き、宣べ伝える」（マコ一六・一五）という福音の「広がり」の面での責務が教会にあります。それは必ず来る審判の時に備えての切迫した意識のもとに行なわれなければなりません（Ⅱペテ三・九、一二）。また「もし福音を宣べ伝えなかつたら、私はわざわざいに会います」（Ⅰコリ九・一六）という信者各人の宣教への使命感も検討されなければなりません。しかしそれと同時に、宣教はみことばによる回心を目的とするもので、その主導権は聖霊が持つておられることを教会は忘れてはなりません（Ⅰコリ一二・三）。教会はそこに立つて初めて人々を復活の主へと導くことができますのです。「主は彼女の心を開いて、パウロの語る事に心を留めるようにされた」（使一六・一四）、「聖霊による喜びをもってみことばを受け入れ」（Ⅰテサー・六）と書かれていますとおりです。教会は宣教を「改宗者づくり」（マタ二三・一五）と心得違えず、「神のことばに混ぜ物」（Ⅱコリ二・一七）をする危険性を避け、みことばが広

まつてゆくように、宣教の使命を果たしてゆく必要があります（使六・七）。

5 主の再び来られる日を待ち望む

教会は、この地上で「キリストのからだを建て上げる」（エペ四・一二）務めを果たしますが、公同の教会の完成はキリストの再臨の時を待たなければなりません（黙二一・三）。教会は花婿なる主イエス・キリストが迎えに来てくださるのを待ち望み（Ⅱペテ三・一二、黙二二・一二）、「主よ、来てください（マラナ・タ）」（Ⅰコリ一六・二二）とキリストの再臨を待ち望む信仰を保持する姿勢が求められているのです。

付記

「教会と国家の問題」

「教会は国家、政治に関与すべきでない」という意見が教会内部に出ることがあります。それについては聖書から検討する必要があります。神は、父祖アダムに「地を従えよ」（創一・二八）と言って、この世界を統治管理する責任を人に与えられました。新約聖書も、「神によらない権威はなく」（ロマ一三・一）と記して、この世を統治する国家の存在を認めています。信者が権威に従い、税を納め（ロマ一三・一〜七）、為政

者のために祈るのは聖書の教えにかなっています（イテモ二・一）。最高の権威は神にあり、最善の統治のあり方は神の国である（詩二四篇）とすると同時に、神は、この世を治める権威者と神の統治を実現する教会の権威をこの地上においておられるのです。ですから、教会と国家との関係の説明にしばしば用いられる「カイザルのものはカイザルに」（マタ二二・二一）というイエスの言葉は、教会が国家に干渉しないことの説明ではなく、国家が神にその本来の務めを果たしている限り、教会も国家を積極的に承認しなければならぬことを教えています。それは同時に、国家の権力には制限を加えられていること、すなわち、世俗統治を越えての支配は許されていないということ、を教えているのです。ですから、神の直接統治下の教会は、いかなる意味においても信仰者の良心の自由を奪い、挫折を強要するような霊的領域への国家の干渉を許してはならず、信仰の自立を主張しなければならないのです。さらに国家にその本来の務めである人道的責任の怠慢、放棄が見られる場合、教会は「隣り人」（ルカ一〇・三六、三七）を守るための何らかの行動を起こすことも教会の務めとして確認しておく必要があります。

九「神はこの世をさばくため日を定めておられる。その日、主イエス・キリストは再臨され、キリストを信じる者は携挙され、主とお会いする。その後、主は地上に千年王国を打ち建てられる。サタンはさばかれ、永遠の火に投げ込まれる。すべての人はからだをもって復活し、救われた者は永遠の祝福を受け、滅びる者は永遠の刑罰を受ける。」

1 神はこの世をさばくため日を定めておられる▽

私たちが生きているこの世は永遠不変であるかのように感じられますが、聖書は、この世が神によってさばかれ、滅びるものであることを啓示しています（詩九六・一三、マタ二四・三五、Ⅱペテ三・一〇、一一、Ⅰヨハ一・一七）。この世がさばかれるのは、この世がサタンのもとにあつて罪と悪に満ちているからです（創六・五、ロマ三・一〇〜一八、二三）。神は聖なる方であり義なる方ですから、この罪と悪の世を見過ごしにはなさらないのです。それはご自身のご性質に反することになるからです。神はご自身の義を現わすために、この世をさばかれます。このさばきは主イエス・キリストによつてなされます。このことは主が父なる神よりさばきの権威を授けられた審判者であること（ヨハ五・二七）と、主を信じるかどうかは永遠のいのちと滅びとの鍵になつてゐること（ヨハ三・三六）とを意味しています。神はその日を永遠の計画の中で定めて

おられるのです（使一七・三一）。ただし、その日がいつであるかについて、聖書は明らかにしていません（マタ二四・三六）。それは神の主権に属することだからです（使一・七）。ですから、その日がいつであるかと特定するようなことをしてはなりません。

終末の前兆としては、偽キリストの出現、戦争、人種・民族・国家の対立、飢饉、地震、迫害、背教、偽預言者の出現、不法の蔓延、愛の冷却化、世界大の福音宣教、家庭崩壊、疫病の流行、反キリストの出現などが挙げられています（マタ二四・三〜一四、マコ一三・三〜一三、ルカ二一・七〜一九、Ⅱテサ二・三）。これらの前兆に注意を払うことで、私たちは終末が近づいていることを知ることができます。しかし、それは、あくまでも終末に対して目を覚まし、備えるためのものであって、終末がいつ起こるか特定するためものではありません。

2 〆その日、主イエス・キリストは再臨され〱

終わりの日に主イエス・キリストは天より再び下って来られます。これを再臨と呼びます。再臨については、主ご自身（マタ二四・三〇、ヨハ一四・三）、御使い（使一・一一）、使徒たち（Ⅰテサ四・一五、一六、Ⅰペテ一・七、一三、Ⅰヨハ二・二八、黙一・七）、また他の聖書記者たち（ヘブ九・二八、ヤコ五・七、八、ユダ一四）によつ

て明確に語られています。それらの証言によると、イエス・キリストは目に見えるありさまで再臨されます（マタ二四・三〇、二六・六四、マコ一三・二六、ルカ二一・二七、黙一・七）。とりわけ、主イエスに関してはご自身が（Iテサ四・一六）、昇天の時と同じ有様で（使一・一一）、栄光に満ちて（マタ二五・三一、テト二・一三）再臨されると記されています。ですから、再臨が起こったならば、すべての人がそれを知ることになります。また、再臨は突然思いがけない時に起こります（マタ二四・四四、五〇、ルカ一二・四六、Iテサ五・二、三、IIペテ三・一〇、黙一六・一五）。私たちはいつそれが起こってもよいように、目を覚まして注意深く生きる必要があります（マタ二四・四二、二五・一三、Iテサ五・六〜一一、IIペテ三・一一、一四、黙二二・一一）。

3 ∧キリストを信じる者は携挙され、主とお会いする▽

再臨の時に信者は空中に引き上げられ、そこで主とお会いします（Iテサ四・一七）。これを携挙と呼びます。その時、私たちのからだは一瞬のうちに主と同じ栄光のからだに変えられ（ピリ三・二一）、携挙の直前に復活した聖徒たちとともに、永遠に主と共にいることになります。この時、「わたしは・・・わたしに与えてくださったす

べての者を・・・終わりの日によみがえらせる」(ヨハ六・三九、四〇、四四、五四)という主の約束が成就するのです。

復活のからだも栄光のからだも同じものと考えられます。それがどのようなものか詳細にはわかりませんが、朽ちないもの、栄光あるもの、強いもの、御霊に属するからだと言われ(一コリ一五・四二〜四四)、復活の主のからだに似たものと考えられます(ピリ三・二一)。弟子たちが彼らの前に現われた方を主であると知りえた事實は、復活のからだにおいてもそれが誰であるかわかるということを示唆しています。

携挙の時期をめぐっては、患難期と呼ばれる終わりの日の激しい苦難の時(ダ二二・一、マタ二四・二一、黙三・一〇)との関係で三つの見解があります。

①患難期前携挙説……信者は患難に会うことなく、その前に携挙される。

②患難期中携挙説……信者はある程度の患難には会うが、患難の頂点より前に携挙される。

③患難期後携挙説……信者は患難期のすべてを経験した後で携挙される。

これらの見解はそれぞれの論拠に一長一短があつて、どの説が正しくどの説が誤りであるか断定するには慎重でなければなりません。

患難期はこの世に住む者をためす試練の時であり(黙三・一〇)、御怒りの大いなる

日です（黙六・一七）。この期間に反キリスト的支配者が出現し、この世を支配し、信者たちを迫害すると考えられます（ダ二七・二三～二五、九・二六、二七、一一・七、Ⅱテサ二・二、三、黙六・一一、一三・一～八）。また、この期間には、戦争、病気、飢饉、天変地異、悪魔による災いが襲います（黙六、八、九章）。患難期前携拳説、患難期中携拳説の立場では、患難期は不信者への神の怒りの現われ、さばきの時、患難期後携拳説の立場では、おもに信者への神の試練の時と理解されています。

4 〆その後、主は地上に千年王国を打ち建てられる〷

主は再臨されると千年の間、王としてこの世を支配されます（黙二〇・一～六）。これを千年王国と呼びます。この時、サタンが捕えられ、底知れぬ所に投げ込まれて活動できなくされます（黙二〇・一～三）。人々は未信者であつても、栄光の主の支配の下でサタンの影響から解放されて、平和、公正、幸福、繁栄を享受します（イザ一・六～九、六五・二〇～二五）。信者は、復活したキリストにある死者も含めて、千年の間キリストと共に王となってこの世をさばきます（Ⅰコリ六・二、黙二〇・四）。また、神とキリストとの祭司となります（黙二〇・六）。

千年の終りには捕えられていたサタンが解放され（黙二〇・七）、もう一度人々を惑

わし、神に逆らって戦いをしかけます（黙二〇・八）。しかし、サタンは敗れて永遠の火に投げ込まれます（黙二〇・一〇）。

千年王国をめぐっては、再臨との関係で三つの見解があります。

①千年王国後再臨説……福音の宣教によつてこの世は良くなつてゆく。それが千年王国であり、キリストはその善に満ちたこの世に再臨される。

②無千年王国説……千年王国は文字通りのものではなく、象徴的に現在の教会を指している。

③千年王国前再臨説……再臨の後に千年王国が地上に打ち建てられる。

①と②とは千年王国に関する聖書の記述を象徴的に解釈し、③はできるだけ字義通りに解釈します。②は基本的には千年王国を教会に置き換え、千年王国を靈的なものと解釈しています。③は千年王国を文字通りの千年と理解する見解と、文字通りの千年ではなく、ある一定の期間と理解する見解とに分かれます。現代では①の見解をとる人はほとんどいません。②と③との間では長い間検討が続けられていますが、どちらが正しくどちらが誤りであると決めつけるのは難しいようです。福音交友会では、千年王国前再臨説の立場をとっています。

5 ∧サタンはさばかれ、永遠の火に投げ込まれる▽

千年王国の初めに捕えられていたサタンは、千年王国の終わりに再び解放され、神に對して最後の戦いを挑みます。しかし、その戦いの敗北とともに神にさばかれ、火と硫黄との池に投げ込まれ、永遠に苦しみを受けます（黙二〇・七〜一〇）。こうして、神に反逆し続けたサタンは、神の主権のもとで定められていたとおり、永遠のさばきに服します。

6 ∧すべての人はからだをもって復活し▽

復活とは靈的なものではなく実際にからだをもった復活であり、二つに分けられます。一つはすでに述べたキリストの再臨の時に起こるキリストにある死者の復活です（Iテサ四・一五、一六）。それは第一の復活とも呼ばれています（黙二〇・四〜六）。もう一つは不信者の死者の復活です。この復活は千年王国の後（黙二〇・五）、大きな白い御座のさばきの時に起こります（黙二〇・一一〜一三）。不信者の復活は神のさばきに服するためのもので、自分の行ないに応じてさばかれる、と記されています（黙二〇・一二）。

7 救われた者は永遠の祝福を受け

キリストの救いにあずかった者は、もはやさばかれることがありません（ヨハ三・一八、五・二四）。信者には、地上においてなした行為に応じて報いが与えられます（II コリ五・一〇）。また、義の栄冠（II テモ四・八）、朽ちない冠（I コリ九・二五）、栄光の冠（I ペテ五・四）などの祝福にあずかります。

イエス・キリストの救いにあずかっている者はすべて新天新地に迎え入れられます（II ペテ三・一三、黙二一・一〜四）。新天新地は、万物更新の時に焼き尽くされる今の天地にかわって（使三・二一、II ペテ三・一二）、神の約束の成就として出現する新しい世界です。ここでは、神が人と共に住まわれ、涙も、死も、悲しみも、叫びも、苦しみもありません（黙二一・三、四）。

信者は永遠に神と共に生きる祝福にあずかります（黙二二・五）。信者が受ける永遠のいのちとは、単に、いつまでも続く、時間的に長いいのちというよりも、むしろ、いのちの質が永遠の神に似たものに変えられることです。すなわち、神の祝福を受けて、人のいのちが質的に永遠のいのちに変えられて、「とこしえからとこしえまで」（詩九〇・一、二）います神と共に生かされることです。

8 へ滅びる者は永遠の刑罰を受ける へ

主権者である神は、白い御座のさばきの時、最終的なさばきをなさいます。これは最後の審判と呼ばれ、すべての者が御座の前に出ます（黙二〇・一二）。さばきの対象となるのは、この世における行動（マタ二五・三一〜四五、Ⅱコリ五・一〇）、ことば（マタ一二・三六、三七）、心の中の思い（Ⅰコリ四・五）などです。さばきの規準は何よりも神の義です（詩九六・一三、使一七・三一）。さらに、それぞれに与えられている啓示の光も規準となります（ロマ二・一二）。

「いのちの書」（黙二〇・一五）に名の記されていない者、すなわち不信者は神の怒りと憤りを受け（ロマ二・五、八）、火の池に投げ込まれます（黙二〇・一四、一五）。そこは永遠に昼も夜も苦しみを受ける所と記されています（黙二〇・一〇）。

付記

「異端の終末論」

*エホバの証人（ものみの塔）

① 終末の年代

創始者C・I・ラッセルは一八七六年に、キリストは一八七四年に再臨したと主張し

ました。その後も、一八七四年に始まったハルマゲドンが一九一四年に終了し、一九一五年にはエホバの証人の国が世界を支配すると予言しました。二代目のJ・F・ルサフォードも、一九一四年に世界は患難時代に突入したと考え、一九一六年は、ハルマゲドンの真つ最中であると説きました。さらに、一九四一年には、数ヶ月後にハルマゲドンが始まると先の説に矛盾することを主張しました。三代目のN・H・ノアも、一九七〇年代の半ばに世界は終わると断言しました。これらは何一つ成就せず、互いに矛盾し、発言のたびに人々を混乱させました。

②キリストの再臨観

キリストは霊者として再臨したので、霊眼の開かれていない一般の人には見えないと主張します。

③天国・新天新地

天国は現在の世界が焼き尽くされてなくなった後に出現するのでなく、悪魔や邪悪な人々が滅ぼされた結果として、現在の世界に誕生する樂園のことであると主張します。彼らは地球が永遠に存続するものと信じています。天国にはエホバの証人のうち特に選ばれた一四万四千人だけが入り、一般のエホバの証人は地上に住むと考えています。

④復活・霊魂・地獄

彼らは、よみとは墓のことであつて、靈魂は肉体の死後生き続けることはない、と考えています。彼らの言う復活とは、靈魂の再創造であり、肉体の復活ではありません。その再創造された靈魂のうち、最後の審判においてさばかれた者は火の池に投げ込まれ消滅するので、永遠に苦しみを味わう地獄というものは存在しない、と教えています。

***原理福音世界統一基督神靈協會（統一原理、統一協會、原理福音、原理研究会）**

彼らは、「教祖文鮮明こそ再臨のキリストであり、韓民族は神の選民である。やがて文鮮明が世界の王として、政治・宗教・思想のすべてを統一し、この世界を支配する。その結果、神が計画された地上天国が復帰される。」と主張しています。一九六三年の夏まで彼らは、「再臨のキリストは目下、東京に待機しており、本年八月一七日（旧暦六月二八日）に世界的ニュースとして公表され、メシヤとしての使命を果たすために、世界の諸王の王として公生涯につく。」と宣伝していました。

十字架に死に、復活し、天に昇られた主イエス・キリストは、彼らの終末論では全く無視されています。

***末日聖徒イエス・キリスト教会（モルモン教）**

創始者J・スミスは信仰十三箇条のなかで、終末について次のように述べています。
「我らは、イスラエル民族が文字どおり集められ、失せたる十の種族が回復させられることを信じる。またシオンが、このアメリカ大陸に打ち建てられ、キリストがみずからこの地上を治め、地は新しくせられ、パラダイスの栄光を受くべきものなることを信じる。」さらに、彼らは、人は死ぬと神になると信じています。

私たちの信仰

一九八八年三月一五日

初版

1200部発行

二〇一三年二月一日

初版訂正版 75部発行

二〇一九年十二月一日

改訂版 電子版発行

発行 福音交友会

堺市西区浜寺昭和町一丁 63

©福音交友会